

ISSN 2435-9823

Nr. 43-44

DER KEIM

東京外国語大学大学院
ドイツ語文学研究会

目 次

<論文>

競合と対立

—現代ドイツ語の *blühen* とその派生動詞における意味分化—

Konkurrenz und Opposition:

Über die semantische Differenzierung bei *blüben* und dessen verbalen Ableitungen

佐藤宙洋 Takahiro SATO 1

<研究ノート>

ドイツ語の不定詞名詞化における項の義務性・非義務性

—非明示的な項の解釈について—

Obligatorik/Fakultativität von Argumenten der Infinitivnominalisierungen im Deutschen

—Zu Interpretationen der impliziten Argumente—

小林大志 Taishi KOBAYASHI 29

<書評>

書評：新本史斉著『微笑む言葉，舞い落ちる散文—ローベルト・ヴァルザー論』鳥影社，2020年

Rezension zu: Fuminari Niimoto: *Lächelnde Worte, nach unten tänzelnde Prosastücke*. Nagano: Choeisha, 2020.

木村千恵 Chie KIMURA 53

研究会便り 57

会則 58

バックナンバー一覧 61

執筆者・査読担当者／原稿募集 66

編集後記 67

競合と対立 —現代ドイツ語の *blühen* とその派生動詞における意味分化—

Konkurrenz und Opposition:

Über die semantische Differenzierung bei *blühen* und dessen verbalen Ableitungen

佐藤 宙洋

東京外国語大学大学院特別研究員

Takahiro SATO

Tokyo University of Foreign Studies, Special Research Fellow

Abstract

Eine der wichtigsten Funktionen der verbalen Präfixe und Partikeln im Deutschen besteht darin, den Sachverhalt, den das Basisverb bezeichnet, aspektuell unterschiedlich zu modifizieren. In den meisten Grammatiken werden *blühen* und dessen verbale Ableitungen als sehr typische Beispiele dafür genannt.

Es ist aber noch zu fragen, was die Unterschiede zwischen *auf-* und *erblühen* (ingressive Verben) und die zwischen *ab-*, *aus-* und *verblühen* (egressive Verben) sind. Solche Konkurrenzsituationen der Verben mit Vorsilben werden in der Forschung eher vernachlässigt, die ein Vorsilbeverb vor allem mit dessen Basisverb vergleicht. Dieses Forschungsdesiderat ist aber bedenklich, zumal die Funktion einer einzelnen Vorsilbe erst dann zu verstehen ist, wenn man sie mit der anderer Vorsilben des stammgleichen Verbs vergleicht und Konkurrenz und Opposition strukturalistisch erfasst.

Die korpusbasierte Untersuchung, die in der vorliegenden Abhandlung angestellt wird, kommt zu folgendem Schluss. Erstens bedeutet *erblühen* tendenziell, dass etwas, was noch nicht da ist, erscheint oder entsteht, während *aufblühen* eher besagt, dass sich etwas, was schon vorhanden ist, entwickelt. Zweitens handelt es sich bei *ab-*, *aus-* und *verblühen* vor allem um Transformativität und Durchgeführtheit. Einerseits drückt nur *verblühen* immer eine Transformation aus, andererseits bedeutet nur *ausblühen* immer, dass ein Prozess zu einem inhärenten Ende führt.

Diese Erkenntnisse lassen sich auf die *glimmen-*, *glüben-* und *klingen-*Gruppe anwenden, die interessanterweise dieselbe Konstellation der Vorsilben haben.



1. はじめに

本稿は、現代ドイツ語の *blühen* およびその派生動詞を対象に、前綴（接頭辞ないし不変化詞）の付与がどのような意味分化をもたらしているのかを解明する。¹

blühen 群は、前綴付与による意味分化の代表的な例の1つである。例えばドイツ語の造語論の代表的な入門書である Erben (2006: 85) でも、前綴動詞における意味分化について論じる際には *blühen* 群が引き合いに出されている。² 当該箇所を引用しておく。

- (1) Sie [Präfixe] bringen Inhaltsmerkmale hinzu, die eine paradigmatische Opposition ermöglichen, d.h. eine distinktive Abhebung des Präfixverbs vom Basisverb (BV) wie von Präfigierungen dieses Basisverbs mit anderen Präfixen; z.B. steht *er-blühen* sowohl in Opposition zu *blühen* wie zu *ver-blühen* [...] Hingegen besteht kein Verhältnis der Opposition, sondern eher der Konkurrenz zwischen *er-blühen* und *auf-blühen* [...] d.h. es gibt nicht nur Präfixe gegensätzlichen, sondern auch solche ähnlichen Inhalts bzw. gleicher grammatischer Funktion. Dabei ist auffällig, daß gerade die formal sehr deutlich unterschiedenen betonten und trennbaren „Verbzusätze“ (z.B. *an-*, *auf-*) funktional den schwachtonigen festen Präfixen teilweise nahezu gleichkommen – auch bei der Verbalisierung von Basisnomina [...], während die Konkurrenz zwischen schwachtonigen Präfixen (*er-blühen*, *°ent-blühen* [...]) oder zwischen betonten Präfixen (*ab-blühen*, *aus-blühen*) weniger häufig auftritt.

(1) で *blühen* 群に関して言われていることをまとめると、次のようになる。すなわち、開始相という点では *erblühen* と *aufblühen*（さらには、有標の使用

¹ 本稿では「派生 (Ableitung)」という用語を、Erben (2006: 80ff.) に倣って広い意味で、つまり接頭辞付与によるものだけでなく、「合成 (Komposition)」として扱われることもある不変化詞付与によるものに対しても用いる。

² ドイツ語文法の基本的な文献でも、*blühen* 群は同様の文脈で頻繁に言及されている。例えば、Duden 4 (2009: 695, 703) では *erblühen*, *verblühen*, *abblühen* に、Admoni (1982: 174) では、*blühen*, *erblühen*, *verblühen* に言及がある。また、ドイツ語で書かれた代表的な言語学辞典でも (Bußmann 2008: 18f.; Lewandowski 1984: 36f.) 動作相の項において、やはり *blühen* 群への言及がある。

域にある (「⁰」 entblühen) が競合し、終了相という点では verblühen, abblühen, ausblühen が競合している。また、開始相の erblühen と aufblühen は、継続相の blühen ならびに終了相の verblühen, abblühen, ausblühen と対立している。

本稿は、こうした競合と対立が、より正確にはどのような在り方をしているのか、という問いを提起する。この問いに答えるためには、競合する erblühen と aufblühen, および verblühen, abblühen, ausblühen の間の意味的な差異をまず解明する必要がある。競合語間の差異が分かれば、対立関係もより精緻に捉えられるはずである。

Stiebels (1996: 10) によれば、「接頭辞と不変化詞の競合」の解明は、「ドイツ語の接頭辞動詞および不変化動詞研究の根本問題」の1つである。また、Erben (2006: 85) も (1) の引用部に続いてこう述べている。「ドイツ語の前綴の体系記述は、こうした在り方を正確に捉え、同種および異種の形態素間の先述した相互作用を完全に記述しなくてはならない」。しかし、ドイツ語前綴の競合と対立の正確な在り方は、本稿が扱う blühen 群に関する研究の現状にも示されている通り、実際のところまだ部分的にしか解明されていない。その意味で本稿のような試みには十分な意義があると考ええる。

本論の構成は以下の通りである。第2章では、blühen をはじめとする個々の語に関して、その語義を実現頻度も含めて記述・確認する。それを踏まえ第3章では、競合する複数の語を比較考察する。それによって一方では、aufblühen と erblühen の差異は「発展」か「出現」かの傾向の違いにあるという結論に、また他方の verblühen, abblühen, ausblühen においては、特に変化の有無と内在的な咲き終わりに到達するか否かという基準での分化が認められるとの結論に至る。第4章では、当該前綴を競合と対立という観点から考察する。開始相と終了相は非対称的であり、先行研究の指摘するような対立関係は認められないとの結論に至る。第5章では、今後の展望を述べる。

考察は、各種辞書類と造語論の文献を参照しながらコーパス調査を中心に進める。使用するコーパスは Deutsches Referenzkorpus で、検索には COSMAS II (IDS, Mannheim) を用いる。³ 検索に際しては、文頭以外に大文字の含まれる語形と、現在分詞形は省く。分析するのは、ある語に関してヒットした例を無作為に上限200例でダウンロードしたデータである (「分析データ」)。200例中から

³ COSMAS II 上で選択するコーパスは、W-öffentlich – alle öffentlichen Korpora des Archivs W (mit Neuakquisitionen)。

手作業で無効な例（例えば、klingen の例を検索・収集する場合に混入してくる abklingen の例など）を取り除いたものを「有効データ」と呼ぶ。⁴

2. 個別の考察

本項では、blühen 群の構成語を個別に扱い、語義の実現状況を記述・確認する。対象は具体的には、blühen, abblühen, aufblühen, ausblühen, erblühen, verblühen の6動詞である。

blüh- を語幹とする前綴動詞としては他にも、anblühen という語があり得る。この語に関しては、DWB や Sanders (1968 [1876] : 173) では記載があるものの、他に記載のある辞書類は見当たらない。また、コーパスで anblühen を検索すると（検索日：2019年9月19日；検索式「&anblühen oder (&blühen /+s0 an)」⁵）ヒット数は3482件となるが、200例無作為抽出しても有効データは検出されない（つまり、200例が前置詞の an が共起する例などで占められ、anblühen の例が含まれない）。こうしたことから、anblühen は現代ドイツ語の語彙項目とは言い難い。また、entblühen という語もあり得る。しかしこの語も、例えば Duden (2014: 597) では「18, 19世紀の古典作家の語彙」とされ、コーパスで検索しても（検索日：2019年8月23日）有効データはコーパス全体で2件のみと極めて少数である。⁶ entblühen も、現代ドイツ語の語彙項目とは言い難い。⁷

ある語の語義を記述する際には、どこからを別の語義とするかという多義に関わる問題があるが、本稿では、文法に関与するような差異がある場合（例えば、完了の助動詞選択に関わる、変化の有無）、および原義からの予測が難しい慣用的な意味の場合にだけ多義を認めることにする。

⁴ この方法では、特に頻度の低い語に関して「有効データ」が十分に集まらない場合も出てくる。したがって「有効データ」を200例にすべく、最大件数（COSMAS II だと1万件）を分析するのが理想的である。しかし時間的な制約もあるので今回は全体の見通しを優先し、「分析データ」を200例に揃えた。

⁵ この式によって、blühen の全語形と an が一語として現れる例（anblühend, anzublühen, angeblüht）、もしくは blühen の全語形の後かつ同一文中に an が表れる例の検索が行われる。なお、検索式に関する情報は以下特別な場合を除き省略する。

⁶ 見つかった2例：Einst, o Wunder! **entblüht** auf meinem Grabe (Wikipedia, 2011) ; Zwischen Norma und Michael **entblüht** eine Romanze. (Wikipedia, 2011)

⁷ Mater (1967: 13) に依拠すると、他にも heranblühen, wiederaufblühen, emporblühen, umblühen が候補として挙げられるが、heran-, wiederauf-, empor- のような「副詞的な動詞不変化詞」（Fleischer/Barz 2012: 419）を持つ動詞は、blühen 群という体系の成員と言えるほど確固とした語彙項目とは考えられないため、本稿では取り上げない。umblühen は DWB や Sanders (1924) には記載があるが、本文で言及した anblühen, entblühen と同様に今日もはや一般的とは言えない。

2.1. blühen

検索日：2019年7月12日；ヒット件数：11万3797件
有効データ（無作為抽出した200例中）：160例

blühen（常に haben 支配）には〈(植物や特定の場所などが)花を咲かせている〉ないし〈(花が)咲いている〉という語義が基本的には認められる（〈咲いている〉と略記，以下同様に適宜略す）。また，この語義が比喩的に，つまり実際の花以外に関して「繁栄している」という意味で用いられることもある。境界的な事例に関して数字が変化する可能性もあるが，筆者の判断では前者の例は103件（2），後者の例は42件だった（3）。⁸

- (2) „Ich bemühe mich, dass immer etwas **blüht**“, erklärt die leidenschaftliche Gärtnerin. (Rhein-Zeitung, 11.08.2000)「いつも何かが咲いている [＜blühen] ようにと努めています」と，その熱心な庭師は説明する。⁹
- (3) Korruption **blüht** aber auch auf der zunehmenden Kluft zwischen Arm und Reich. (Mannheimer Morgen, 18.11.2009) 拡大する貧富の差の上には汚職が栄えている [＜blühen]。

blühen には他に，「人」の3格を伴って〈(好ましくないことが誰かに)起こる，生じる〉という慣用的な意味用法がある。当該用例は収集例中に13件含まれていた（4）。¹⁰

- (4) Fast jeden Tag aufs Neue warnen Experten vor den gravierenden Folgen, die uns **blühen**, wenn wir jetzt nicht auf einen ökologisch verträglichen Lebensstil umschwenken. (Spiegel-Online, 04.05.2014) 毎日のように新たに専門家たちは，私たちが今にでも環境に負荷をかけ過

⁸ 大方の辞書は，後者（3）を別語義としているが，本稿では〈咲いている〉という語義のみを立て，（3）のような用例は当該語義の比喩的な用法と捉える。

⁹ 引用に際してはこのように筆者による和訳を付す。なお，当該語の訳は，その語義を意識して行うが，両者は常に完全に一致するわけではない。語義は，文脈から独立した，語に内在する意味だが，訳語はそれが文脈に影響を受けて実現した結果である。

¹⁰ 当該意味用法の成立背景を考えるには，佐藤（1982）の記述が参考になる。佐藤（1982: 233）は，当該 blühen に「(これから)咲く」という語義を認めているが，以前は blühen にも，今日 aufblühen や erblühen によって専ら担われている「咲く」という語義があったと考えれば，それが「生じる」という意味へと拡張されたと解することができる。

ぎない生活様式に移らないならば私たちに起る [＜ blühen] 重大な帰結に警鐘を鳴らしている。

2.2. abblühen

検索日：2019年7月2日；ヒット数：973件
有効データ（無作為抽出した200例中）：30件

上記のヒット数・有効データ数からは、abblühen の出現頻度があまり高いことが分かる。DWDS（最終アクセス：2019年9月13日，<https://www.dwds.de/>）¹¹ の頻度表示でも、7段階中最も低い評価となっている。なお、Duden（2014: 95）のように、abblühen を高尚な（gehoben）表現とする辞書もあるが、収集データから文体的な特殊性を感じ取れなかったこともあり、この点に関しては判断を保留する。

abblühen は、前状態と、それとは異なる後状態からなる変化(Transformation)を表す場合も、変化ではなく終局(Endphase)にあることを表すだけの場合もある。前者の場合は、sein 支配、後者の場合は haben 支配となる（Zifonun/Hoffmann/Strecker 1997: 1865f.）。今回の調査では、sein 支配の例は17件（5）、haben 支配の例は3件となった（6）。

変化動詞としての abblühen には、〈(植物や特定の場所などが) 花を咲かせるのを止める〉ないし 〈(花が) 咲き止む〉という語義が想定できる。他方で終局表示の abblühen には、〈(植物や特定の場所などが) 花を咲かせるのを止めるところである〉ないし 〈(花が) 咲き止むところである〉という語義が想定できる。

- (5) Schon beim Kauf sollte man aber darauf achten, dass die eigentlichen Blüten, die sich im Zentrum der Hochblätter befinden, noch nicht **abgeblüht** sind. (Vorarlberger Nachrichten, 16.12.1999) 買う時点で、花被の中心にあるメインとなる花が咲き止んで [＜ abblühen] いないことにしっかり注意した方がよい。
- (6) Der Kirschbaum hat **abgeblüht**, im Biotop haben die Kaulquappen Beinchen angesetzt [...] (Muschg, Adolf: Sutters Glück, 2003[2001]) 桜の木は花を咲かせるのを止めるところであったし [＜ abblühen], ビオトープではオタマジャクシが足を生やした。

¹¹ 同 URL は以下繰り返しさない。

また, abblühen が比喩的に, つまり実際の花以外に関して用いられることもある (7)。有効データ30件のうち, 当該事例は3例確認された。

- (7) Keller beschreibt die Zeit als weisses Pergament, auf das wir alle mit unserem Blut schreiben, bis uns der Strom vertreibt. Uns bleibt gerade noch die Frist, unseren Liebesbrief aufs Blatt zu setzen: in Bewunderung der Schönheit der Welt. Wir blühen auf und **blühen ab**. (NZZ am Sonntag, 19.04.2015) ケラーは時間を白い羊皮紙として描いている。私たちはみな, 流れによって追いやられるまで, その上に自分の血で文字を書く。私たちには, 世界の美しさを讃嘆しながら恋文をしたためるだけの猶予がちょうど残っている。私たちは花開きそして咲き止む [**< abblühen**]

2.3. aufblühen

検索日: 2019年7月12日; ヒット数: 3万5254件
有効データ (無作為抽出した200例中): 155例

aufblühen (常に sein 支配) に対しては, 〈(植物や特定の場所などが) 花を咲かせ始める〉ないし 〈(花が) 咲き始める〉という語義が認められる (8)。

- (8) Auf der Wiese entfalten sich die ersten Gänseblümchen, in den geschützten, warmen Weinlagen **blühen** die ersten Mandeln **auf**. (Rhein-Zeitung, 13.03.2012) 原っぱでは最初のヒナギクが花開き, 守られた暖かいブドウ畑では最初のアーモンドが咲き始める [**< aufblühen**]

有効データ155例中140例においては, 当該語義の比喩的な拡張用法が確認された (9)。aufblühen は比喩的に用いられる頻度が非常に高いと言える。

- (9) Und wie oft hat man dem schwermütigen Hanseaten Johannes Brahms das Etikett „urdeutsch“ angeklebt. Aber war das nicht der, der in Wien **aufblühte** und immerhin fast zwei Dutzend „Ungarische Tänze“ ersann? (Nürnberger Nachrichten, 28.11.2015) ハンザ都市出身のこの沈鬱なヨハネス・ブラームスに, 「ドイツ本来の」というレッテルがなんと頻繁に貼られたことか。しかし, 彼こそ, ウィーンで咲き始め [才能を開花させ; **<**

aufblühen]「ハンガリー舞曲」をとにかく20曲くらい考えついた人物ではなかったか。

2.4. ausblühen

検索日：2019年7月12日；ヒット数：2996件
有効データ（無作為抽出した200例中）：12例

上記のヒット数・有効データ数から、ausblühenは今日稀な表現と言える。DWDS（最終アクセス：2019年7月13日）の頻度表示でも7段階中最も低く評価されている。

Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 1865f.) に依拠すれば、ausblühen も abblühen と同様に、sein 支配で変化 (Transformation) を表す場合も (10), haben 支配で終局 (Endphase) を表す場合もあることになる (11)。前者の用法には、〈(植物や特定の場所などが) 花を咲かせ終わる〉ないし 〈(花が) 咲き終わる〉という語義を、後者の用法には、〈(植物や特定の場所などが) 花を咲かせ終わるところである〉ないし 〈(花が) 咲き終わるところである〉という語義が想定できる。

- (10) Die Lorraine-Begonie strahlt jetzt mit rosafarbenen Blüten. [...] Ist die Exotin im Februar **ausgeblüht**, ist sie jedoch ein Fall für den Kompost. (Nordkurier, 07.01.2012) フユベコニアは今ピンクの花を咲かせている。この異国の植物が2月に咲き終わって [< ausblühen] しまっても、たい肥作りに役立つ。
- (11) Das schöne Wetter lässt Allergiker in Berlin und Brandenburg besonders stark leiden. [...] Die einzig gute Nachricht: Die Erle hat in diesem Frühjahr **ausgeblüht**. (Berliner Morgenpost, 04.04.2014) この好天がベルリンおよびブランデンブルクのアレルギー患者たちをことのほか苦しめている。(中略) 唯一のよい知らせは、ハンノキがこの春は咲き終わるところである [< ausblühen] ことだ。

詳しくは次の第3章で論じるが、ausblühen のこの〈咲き終わる (zu Ende blühen)〉という語義は、先に abblühen に認めた〈咲き止む (aufhören zu blühen)〉という語義とは必ずしも一致しない。〈咲き終わる〉においてのみ、その花に内在する咲き終わりに至ることが含意される。

ところで ausblühen に対して〈満開になる〉という語義を想定している辞書もあるが(国松他編1998: 226; Sanders 1924: 57), 本稿は, 当該の意味はあくまでも〈咲き終わる〉という語義の1つの現れと考える。例えば, (11)でも「ハンノキが満開だった」とも訳せるが, だからといって〈満開になる〉という語義を別立する必要はないと考える。なぜなら, 〈咲き終わる〉ことは満開になっていたことを含意するからである。また, 国松他編(1998: 226)の記述する, haben 支配だと〈咲き終わる〉という語義, sein 支配だと〈満開になる〉という語義といった, 語義区分の文法的根拠も実例では確認できない。さらに, Duden (2014), DWDS (最終アクセス2019年7月13日), Wahrig (2011), DWB, 相良(1978)のように〈満開になる〉という語義を記述していない辞書も多い。

なお, 収集例には当該語義の ausblühen が, 比喩的に, つまり植物や花以外の主語に対して用いられている例も2件見られた(12)。

- (12) [...] Bushs innenpolitische Zores verhindern vorläufig, daß die „neue Weltordnung“ zur gefährlichen Drohung **ausblüht**. (Salzburger Nachrichten, 13.06.1992) 内政に関するブッシュの混乱は, 「新世界秩序」が脅威にまで咲き終わる [< ausblühen] のを一時的には防ぐことになる。

ausblühen には第3に, 〈白華する／している〉ないし 〈風解する／している〉という化学に関する語義が認められる。そうした例は4件確認された(13)。¹²

- (13) Kundig führt er durch die Katakomben, an deren Wänden Schimmel wuchert und Salpeter **ausblüht**. (FOCUS, 07.05.2007) 精通した仕方では彼はカタコンベの中を案内する。壁にはカビが繁茂し, 硝石が白華している [< ausblühen]。

¹² なお, 収集例中には, ausblühen が再帰用法と思われるかたちで実現している例も見られた: Zum Glück war das Unheil vorübergehend und jetzt schon wieder fast vergessen. Bis der Raps anfang zu blühen und nach einem schönen ausgiebigen Frühlingslauf... Na ja, hat sich ja bald **ausgeblüht**, der Raps. Mal sehen, was dann umherfliegt. (Nordkurier, 23.05.2015) こうした用法は, 各種の辞書類でも記述されておらず特殊である可能性が高い(Sanders (1924: 57) や相良(1978: 137) では, ausblühen の他動詞用法も言及されているが, その際認められているのは「(植物を)花を咲かせて弱らす」という語義)。

2.5. erblühen

検索日：2019年7月12日；ヒット数：1万741件
有効データ（無作為抽出した200例中）：164例

erblühen（常に sein 支配）は、しばしば高尚な語ないし雅語とされるが（Duden 2014: 612; 国松他編1998: 684など）、頻度や出典に鑑みる限り、例えば一般的な語とされる先述の aufblühen と異なる使用域にあるとは思えない。実際、両語が同一文中に共起する例も見つかる（14）。よって本稿では erblühen の使用域に関する判断を保留したい。

- (14) Mitten im Raum **erblüht** mannshoch Löwenzahn, fünf grüne Stengel samt Blättern, die gelben Blüten **aufgeblüht** oder noch als Knospe. (Salzburger Nachrichten, 18.11.1998) 中央では人の背丈もあるタンポポが咲き始める [＜erblühen]。葉っぱ付きの緑の茎が5本あり、黄色い花々は開花している [＜aufblühen] か、まだつぼみである。

erblühen にも、〈(植物や特定の場所などが) 花を咲かせ始める〉ないし 〈(花が) 咲き始める〉という語義が認められる（15）。

- (15) Der Efeu ist auch bei Tieren beliebt. Denn er **erblüht** spät im Herbst und trägt im Frühling reife Früchte. (Mannheimer Morgen, 26.11.2016) ツタは動物たちにも好かれている。というのも、秋遅くに咲き始め [＜erblühen]、春に実が熟すからである。

判断の難しい例もあったが、収集例164例中105例においては、当該語義の比喩的な拡張用法が確認された（16）。

- (16) Das Transportmittel, das einst Amerika bewegte und neue Städte entlang seiner Gleise **erblühen** liess, hat seit der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts einen stetigen Niedergang erlebt, ohne dass es seine nostalgisch verklärte Beliebtheit eingebüsst hätte. (NZZ am Sonntag, 13.09.2009) かつてアメリカを動かし、新しい街々を沿線に咲かせ始めた [＜erblühen] 鉄道という交通手段は、20世紀前半以来常に衰勢であるが、懷古趣味的に美化されており人気を失っているわけではない。

2.6. verblühen

検索日：2019年7月12日；ヒット数：4011件

有効データ（無作為抽出した200例中）：103例

verblühen（常に sein 支配）には、〈(植物や特定の場所などが) 花を咲かせるのを止める〉ないし 〈(花が) 咲き止む〉という語義が認められる (17)。また、有効データ103例の中には、この語義が比喩的に用いられている例が11件確認された (18)。

- (17) Rosen dagegen empfiehlt die junge Frau nicht. „Sie **verblühen** zu schnell.“ (Mannheimer Morgen, 24.08.2011) バラは、それに対しこの若い女性は勧めていない。「バラはあまりに早く咲き止みます [< verblühen]」
- (18) Die drei erwachsenen Töchter sind, obwohl knapp über 20, nach ihrer Hochzeit **verblüht**, weil einsam, schlaflos oder nymphomanisch. (Spiegel-Online, 28.08.2000) この3人の成人した娘たちは、20を過ぎたばかりだというのに、結婚後は咲き止んでしまっている [< verblühen]。孤独、不眠、ないし色情亢進ゆえに。

verblühen の語義記述に際し「しほむ・しおれる」という表現を添える辞書も多いが（国松他編1998: 2496; Duden 2014: 2139）、詳しくは3.2で述べるように、「しほむ・しおれる」というのは、〈咲き止む〉という語義の1つの現れであると考えられる。

ところで、Duden (2014: 2139) や国松他編 (1998: 2496) のように、verblühen に他にも〈密かに逃げる、ずらかる〉という語義を記述している辞書もあるが、今回の有効データ例には、この語義の実現と解される例は見られなかった。特殊な使用域の語と考えられるので本稿では以下この語義を考慮しない。

2.7. 中間まとめ

各語における語義の実現状況をまとめると、次のようになる。

	blühen	ab.	auf.	aus.	er.	ver.
〈咲いている〉	✓	-	-	-	-	-
〈～に起こる〉	✓	-	-	-	-	-
〈咲き始める〉	-	-	✓	-	✓	-
〈咲き止む〉	-	✓	-	-	-	✓
〈咲き止むところである〉	-	✓	-	-	-	-
〈咲き終わる〉	-	-	-	✓	-	-
〈咲き終わるところである〉	-	-	-	✓	-	-
〈白華する〉	-	-	-	✓	-	-

表1. blüh- 群における語義の実現状況

3. 比較による考察

3.1. 〈咲き始める〉

表1に示したように、*aufblühen* と *erblühen* は〈咲き始める〉という語義において競合している。では、両語はどのように使い分けられているのだろうか。

両語の意味的な差異に関しては、既に複数の文献で論じられている。その中で Storch (1978: 141) や Stiebels (1996: 74f.) は、項の種別に関する選択制限の違いを指摘している。Stiebels (1996: 74f.) によれば、(19b) において不変化詞 *auf* は、花が開くという空間的な (*lokal*) 意味合いを加えることに貢献しているという。

(19) a. Die Rose *erblüht/blüht auf*. (Stiebels 1996: 74)

b. Die Knospe ?*erblüht/blüht auf*. (*ibid.*)

この指摘はしかし *Die Knospe blüht auf* が容認されることの説明にはなり得るが、それだけでは *Die Knospe erblüht* の容認性が低いことの説明にはならないように思われる。*Die Knospe erblüht* の容認性が低いとしたら、それは一体

¹³ もちろん、この選択制限の存在自体も問題になり得る。*erblühen* の有効データ164例には、*Die Knospen* (pl.) を主語として伴い、かつ創造的な用法とは思えない例も含まれていた。Jetzt *erblühen* die Knospen in voller Pracht. (Hamburger Morgenpost, 03.03.2017) [今やつはみが満開に咲く (< *erblühen*)] 先行研究でも Goergen (1994: 78) において、Eine Knospe (sg.) *erblüht*. という文が通常の例として挙げられている。しかし、選択制限かどうかはさて置き、(19b) の容認性が低いことは、あるインフォーマントも認めており、かなり確からしいと言える。

なぜか。¹³

1つの説明は、er-は空間的ではなく、したがって空間的な意味も持ちうる auf-と比べ抽象的である、という線で与えられる。開花という出来事を具体的に見れば、つぼみが徐々に開き、開ききった状態になるという展開が典型的と考えられる。つまり、開くのは、具体的に言えばつぼみである。その意味で、er (blühen) が非空間的であるとすれば、その抽象性が、「つぼみ」と言う際の具体的な事態把握と齟齬をきたすということが考えられる。

このような見解をとる文献も実際にある。第1に Dewell (2015: 150f.) は、両語の差は基本的には使用域に関わるとしながらも、Stiebels (1996: 74f.) の指摘する選択制限に触れ、不変化動詞である aufblühen が「個々の花やつぼみに対する、より高い注意を引き起こす」のに対し、接頭辞動詞である erblühen は、「[焦点の] 拡散したプロセス」を表す、と述べている。これを本稿の Dewell (2015) 理解に従って言い換えれば、aufblühen は事態を時間的な展開に沿って具体的に捉えるのに対し、erblühen は事態を要約的・抽象的に捉える、ということになる。第2に Benoist (2011: 148) は、「aufblühen は目で見えるプロセスを表すのに対し、erblühen ではプロセスが「知的」に把握されるようである」と述べているが、この指摘も、具体的対抽象的という説明に収斂すると考えられる。

Die Knospe erblüht (19b) という文の容認性が低いことには、しかしながら、少し違った角度からよりよい説明が与えられると本稿は考える。開花という出来事には、いわば「出現」という捉え方と「発展」という捉え方があり得る。つまり、つぼみさえも未出来であったところから花が出現する（被成変化）と捉える場合と、つぼみは既にあり、その発展として花が咲く（被動変化）と捉える場合とがあり得る。実例分析からは後述のように、erblühen が「出現としての開花」を、aufblühen が「発展としての開花」を表す傾向が確認される。そうだとすれば、erblühen は Die Knospe を主語として伴い難いと予想される。なぜなら、その場合つぼみは既存と解釈される以上、全体として aufblühen が典型的に表す「発展としての開花」という解釈に傾き、erblühen が典型的に表す「出現としての開花」と齟齬をきたすと考えられるからである。

erblühen が「出現としての開花」を表す傾向があるのに対し、aufblühen が「発展としての開花」を表す傾向があることは、いくつかの観察によって裏付けられる。第1に、主語項に当たる名詞句が定である割合は aufblühen における方が高く、反対にそれが不定である割合は erblühen における方が高い。今回の収集例では表2に示す分布になる。もちろん両者に完全な対応が見られるわけ

ではないが,¹⁴ 被成物は不定表示と、被動物は定表示と親和的であり、定性に関するこうした差異は、上記の傾向を示唆していると言える。

	定	不定	不明	計
erblühen	101 (61.6%)	62 (37.8%)	1 (0.6%)	164 (100%)
aufblühen	127 (81.9%)	25 (16.1%)	3 (1.9%)	155 (99.9%)

表2. 主語項に当たる名詞句の定性

第2に、aufblühen は、過程に注意を向ける副詞、例えば「徐々に」という意味の allmählich と問題なく共起するのに対し、erblühen はそれと共起し難いことも本稿の見解を裏付けている。¹⁵ なぜなら、「出現」においてよりも「発展」において、過程に注意が向けられやすいと考えられるからである。

まず、aufblühen に関して述べる。同コーパスで aufblühen と allmählich の共起例を検索し（検索日：2019年8月29日）収集した事例を分析した結果、当該事例は53件となった。両語は問題なく共起することが分かる。¹⁶ 収集例から、過程に注目していることの明らかな例を挙げる（20）。

- (20) Marko Mimica ist kein Mensch, der das Leben leicht nimmt. Er wirkt eher nachdenklich, tiefsinnig, ein bisschen verschlossen. Wenn man zwei Stunden lang mit ihm spricht, ist es schön zu beobachten, wie er **allmählich aufblüht**. Die Sätze werden immer länger, die Gesten

¹⁴ 主語項に当たる名詞句が不定であるにも関わらず被動変化が表されている例：Die Schwierigkeit der Probleme wie die Bedeutung, die ein Erfolg bei den Bemühungen um eine friedliche Wasserstoffverschmelzung haben würde, ließ einen Zweig der Physik **aufblühen**, der noch vor zwei Jahrzehnten wenig Beachtung gefunden hatte: die Plasmaphysik. (Die Zeit, 02.05.1969)

¹⁵ この主張は、Dewell (2015: 132) やとりわけ Erben (1972: 73) の次の指摘に着想を得ている。welche [an-, auf-, ein-, los-] nur eine lose Bindung mit dem Verben eingehen und weniger das punktuelle Einsetzen eines Vorgangs als die Phase des Anlaufens, Ingang-kommens oder -bringens bezeichnen [als er- und ent-]. (Erben 1972: 73) er- との対比はなされていないが、aufblühen の auf- が「徐々に進む発展 allmähliche Entwicklung」を表すという指摘は Goergen (1994: 44) もしている。また、er- 動詞について Stiebels (1996: 73) は、大抵の er- 動詞は allmählich や nach und nach と共起できないと述べている。

¹⁶ DWDS の Wortprofil における aufblühen の記載では（最終アクセス：2019年7月29日）、allmählich が当該語と13番目に高い頻度で共起する副詞規定として挙がっている。これは、非常に高い頻度とは言えないだろうが、少なくとも稀と言える頻度ではないように思われる。他方の erblühen に関しては（最終アクセス：2019年7月29日）、allmählich との共起は記載されていない。

größer, bis er am Ende sein Gegenüber immer wieder temperamentvoll anstupst. (Berliner Morgenpost, 28.04.2016) Marko Mimica は、陽気な人間ではない。彼はむしろ物思いに沈みがちで、思慮深く、少し打ち解けないところがある。2時間彼と話せば、彼が徐々に [allmählich] 花開く [< aufblühen] のがよく観察できる。文はどんどん長くなり、身ぶりは大きく、終いには相手を何度も情熱的に小突くまでになる。

他方の erblühen は先述の通り allmählich と共起し難い。しかし全く共起しないというわけではなく、同コーパスで erblühen と allmählich の共起例を検索したところ（検索日2019年7月28日）、当該事例は次の2件見つかった。

- (21) Caroline Vollmann spricht von „Kümmernissen“ anstatt von „Leid“, was besser ins Milieu passt. Zwar verfeinert sie den „Mist“ zum „Dung“ (der vermutlich weniger streng riecht), aber sie vermeidet den Bürokratismus des Verbs „entwickeln“, indem sie kurz und bündig schreibt, Emma Bovary, sei „nach und nach zum Erblühen gebracht worden“ – wobei allerdings die Stufen und die Steigerung verloren sind.

Maria Dessauer kennt auch die „Begierden“, spricht aber exakter von der „Erfahrung der Lust“, veredelt den „Mist“ noch weiter zum „Dünger“ und verzichtet auf Steigerung und Entwicklung, indem sie die Heldin, schon weit entfernt vom Original, „**allmählich**“ **erblühen** lässt. (Süddeutsche Zeitung, 20.10.2012)[第1段落略] Maria Dessauer は「欲望」という言葉も熟知してはいるが、「快樂の経験」という、より正確な言い方をし、「こやし」を「肥料」という高尚な言い方にし、主人公の女性を、原作から逸脱するかたちで、「徐々に」[allmählich] 花開かせる [< erblühen] ことによって、増大と発展を断念している。

- (22) Wenn die ersten wärmenden Sonnenstrahlen das Land **allmählich** wieder **erblühen** lassen, dann geht auch die Saison für die Hobbygärtner unter uns wieder los. (Niederösterreichische Nachrichten, 31.03.2017) あたたかな日差しが大地を徐々に [allmählich] また花開かせだす [< erblühen] 時、私たちの間にいるガーデニング愛好家たちのための季節もまた始まる。

しかし、この2例が反例になるとは限らないように思える。(21) では、第1段

落から推察するに、翻訳者が *entwickeln* という表現を使う代わりに、*allmählich erblühen* という訳を採用していること、しかしそのことで、「増大と発展」の意味が失われていることが指摘されている。すると、この *allmählich* は必ずしも *erblühen* の「過程への注目」という働きをしているわけではない、ということになる。*allmählich* には、「そろそろ」とも訳し得る、ある出来事自体の過程ではなく、それが生じるまでの過程を表す用法もあるが（国松他編1998: 87: 「Wollen wir *allmählich* gehen? そろそろ出かけようか」）、(21) の *allmählich* がこれに当たる可能性は高い。また (22) においても、同様の解釈が成り立つ可能性がある。

第3に、あるインフォーマントも、次に (23) として再掲する *erblühen* の既出の例 (16) に関して、本稿の見解を裏付ける趣旨の発言をしている。(23) において「新しい街々」は鉄道が通る前は無かったと解されるが、この *erblühen* を *aufblühen* に替えると (23'), 発展前にも街の原型のようなものがあつたと解されると言う。

(23) Das Transportmittel, das einst Amerika bewegte und neue Städte entlang seiner Gleise **erblühen** liess, hat seit der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts einen stetigen Niedergang erlebt, ohne dass es seine nostalgisch verklärte Beliebtheit eingebüsst hätte. (NZZ am Sonntag, 13.09.2009) かつてアメリカを動かし、新しい街々を沿線に栄え〔*erblühen*〕させた鉄道という交通手段は、20世紀前半以来常に衰勢であるが、懐古趣味的に美化されており人気を失っているわけではない。

(23') Das Transportmittel, das einst Amerika bewegte und neue Städte entlang seiner Gleise **aufblühen** liess, ...

以上のことから本稿は、*erblühen* には「出現としての開花」を表す傾向があるのに対し、*aufblühen* には「発展としての開花」を表す傾向がある、と考える。

3.2. 〈咲き止む〉とその類語義

表1 (2.7) にも示したように、個別の考察からは、〈咲き止む〉という語義において *abblühen* と *verblühen* の競合が見られるということになるが、「はじめに」でも紹介したように、先行研究では終了相という括りで *abblühen*, *ausblühen*, *verblühen* の3語の競合が語られることが多いので、本節の考察もそれに準じる。そうすることで、例えば〈咲き止む〉と〈咲き終わる〉の違いもより明確になる。

当該3語の差異に関しては、Eberhard (1982 [1910]: 3ff.) が大変興味深い論述をしているので (24), それを本節の考察の出発点としたい。

- (24) *verblühen* bezeichnet mehr das Welken, *abblühen* mehr das Abfallen der Blütenblätter; *ausblühen* bedeutet, daß die Zeit der Blüte für eine Pflanze völlig vorüber ist, oder daß die Blüte zu vollständiger Entfaltung gekommen ist. So hat ein Rosenstock, der für den Augenblick *abgeblüht* hat, doch noch nicht *ausgeblüht*, wenn er nach kurzer Zeit noch einige verspätete Blüten treibt, und eine Rose kann *abblühen*, ohne *ausgeblüht* zu haben (wenn sie z.B. durch ungünstige Witterung geschädigt wird). [...] [*Verblühen*] steht vielfach in übertragener Bedeutung, z.B. *verblühte* Wangen. In dieser übertragenen Bedeutung bezeichnet es gewöhnlich die rasche Vergänglichkeit alles Irdischen und ist sinnverwandt mit *verwehen*, *vergehen*, *verwelken*, *enteilen*, *entfliegen*, *dahinschwinden*, *entschwinden*; doch bezeichnet es nicht das Vergehen schlechthin wie die übrigen Ausdrücke, sondern hebt das Vergehen des Schönen, Jugendlichen und Kräftigen hervor. (Eberhard 1982 [1910] 5f.)
- verblühen* はしおれることを, *abblühen* は花びらの落花をむしろ表し, *ausblühen* は, ある植物の花期が完全に過ぎたこと, ないし, 花が完全に花開くに至ったことを表す。例えば, 一時花を咲き落とした／花を咲かせるのを止めた [*< abblühen*] バラの株であっても, すぐにまた遅咲きの花をつけるならば, まだ咲き終わって [*< ausblühen*] いないことになる。バラは咲き終わらずに [*< ausblühen*] 花を咲き落とし／花を咲かせるのを止め [*< abblühen*] うるということである (例えば悪天候の被害によって)。*verblühen* は比喩的な意味で様々に用いられる。例えばこけた [*< verblühen*] 頬。こうした比喩的な意味において *verblühen* は通常, あらゆる地上のものの儚さを表し, *verwehen* 「吹き消す, 吹き消される」, *vergehen* 「消える」, *verwelken* 「しぼむ, しおれる」, *enteilen* 「(急いで) 立ち去る」, *entfliegen* 「逃げ去る」, *dahinschwinden* 「消え去る」, *entschwinden* 「消え失せる」と類義である。しかし *verblühen* は, 他の諸表現のように消滅そのものを表すのではなく, 美しいもの, 若々しいもの, 力強いものの消滅を強調する。

第1に *abblühen* が「花びらの落花」を表す (24) という見解に関しては,

部分的にはあるが賛同できる。例えば今回の有効データである30例には次のような文例があったが、この例においては、分離・落下の意味合いが窺われる。なぜなら、花が普通の仕方で咲き終われば「さや」が付くのであるから、ここでは落下が表されていると考えられるからである。

- (25) In Niedersachsen wuchs der Raps in vielen Gebieten so rasant in die Länge, dass die Pflanzen insgesamt zu wenig Nährstoffe abbekamen. Die Folge: der Raps verkümmerte und **blühte** ohne Schote **ab**. (Hamburger Morgenpost, 22.05.2018) ニーダーザクセンではナタネが多く場所で、全体として栄養がいきわたらなくなるほどの勢いで背を伸ばしている。その結果、ナタネは育ちが悪くなり、さやを付けずに花が落ちた [＜abblühen]。

それに対し、同収集例中の次のような例では、分離・落下の意味合いは希薄と考えられる (26)。なぜなら、仮に当該の意味合いが濃厚であれば、その後に「落ちている」[＜herabschlagen] という表現を加える必要はなかったからである。Rich (2003: 162) も述べているように、ab- の具体的な意味合いの実現はあくまでも文脈に依存する、と言える。

- (26) Blütenkopf, die unteren Blüten sind **abgeblüht** und herabgeschlagen. (Wikipedia, 2011) 花芽、つまり花の下の方は咲き止んで [＜abblühen] 落ちている。

したがって、abblühen の語義としては〈咲き止む〉というのがやはり適切で、それが「落花」であるかどうかは文脈次第と言える。

第2に ausblühen が「花期が完全に過ぎたこと」を表すという見解 (24) に関しても賛同することができる。ausblühen は〈咲き終わる／咲き終わるところである〉ことを表すのに対し abblühen は〈咲き止む／咲き止むところである〉ことを、verblühen は〈咲き止む〉ことを表す、と本稿は先述した。この区別に則れば、abblühen と verblühen は内在的な咲き終わりに至るかどうかには中立であるのに対し (27) (28) (29) (30), ausblühen はそれに至ることを含意するということになる (30')。その意味で、Hundsnurscher (1997: 190) のように、当該 aus- は、当該 ab- と比較して「終結的 [terminativ] なニュアンスを強く有する」と言うこともできるだろう。

- (27) Heftiger Wind und sehr sonniges Wetter ließen die Bäume zum großen Teil schon wieder **abblühen**. (Niederösterreichische Nachrichten, 12.04.2011) 激しい風と日照りで木々の大部分はもうまた花を咲かせることを止めた[< abblühen]。[=内在的な咲き終わりに未到達]
- (28) Die Eiben-Pollen werden die Allergiker als nächstes plagen, dann folgen Weiden, Pappeln und Birken. Sind diese Bäume **abgeblüht**, sind die Sorgen für viele Betroffene noch nicht vorbei. (Nordkurier, 15.04.2013) イチイの花粉が次にアレルギー患者を苦しめることになるが、それからヤナギ、ポプラ、シラカバと続く。これらの木々が花を咲かせることを止めても(< abblühen)、多くの患者はまだ安心できない。[=内在的な咲き終わりに到達していると考えられる]
- (29) Bis Mitte Juli blühen im Unterland die Rapsfelder in leuchtendem Gelb. Dann **verblühen** sie, und die Rapssamen können geerntet werden. (Tages-Anzeiger, 08.05.2008) 7月の中頃まで低地ではナタネ畑が明るい黄色の花を咲かせる。それから花が咲き止み、種が収穫できるようになる。[=内在的な咲き終わりに到達]¹⁷
- (30) Es sind Pflanzen mit meist starkem Knospen- und Blütenbesatz. Und sie müssen sich schlagartig vom kühlen, feuchten Klima des Glashauses auf einen trockenen Platz im Haus einstellen. Häufig werden sie sogar direkt ins geheizte Wohnzimmer gestellt. Eine enorme Stresssituation! Kommt dann auch noch eine direkte Besonnung hinzu, **verblühen** die Azaleen in kürzester Zeit (Nürnberger Nachrichten, 25.11.2000) それらは、たいていしっかりとしたつぼみと花株のある植物である。それらが、涼しく湿気のある温室の気候から急に、家の中の乾燥した場所に順応しなくてはならないのである。それどころか直に暖房のきいたリビングに置かれてしまうことも多い。非常にストレスがかかる状況だ！加えて直射日光にさらされようものなら、アザレアは極めて短期間に咲き止んでしまう(< verblühen)。[=非本来的な咲き終わり方：内在的な咲き終わりに未到達]
- (30')¹⁸ Kommt dann auch noch eine direkte Besonnung hinzu, **blühen** die

¹⁷ ver- は一般に、「予期からの逸脱」(Brinkmann 1971: 236f.) ないし「標準的な経過からの逸脱」(Ogawa/Rusterholz 2011) という意味に貢献すると指摘する文献もあるが、こうした指摘は当該 ver- には完全に当てはまるわけではないと言える。

Azaleen in kürzester Zeit **aus** [18] はあるインフォーマントの判断。(30)の *verblühen* を *ausblühen* で言い換えることは、*ausblühen* が稀な表現であることは差し引いても、やはり意味的に困難であるという。「アザレア」がこの状況において短期間で咲き止む [*verblühen*] ことはあっても、咲くことをまっとうする [*ausblühen*] ことはないからだと考えられる。]

第3に、*verblühen* は「しおれること」を表し、また「美しいもの、若々しいもの、力強いものの消滅を強調する」という指摘 (24) はどうか。まず前半の「しおれること」に関してだが、各種の辞書記述に鑑みても *verblühen* が「しおれる、しぼむ (*verwelken*)」ことを表し得ることは同意できる。しかし、当然のことながら *verblühen* は *verwelken* とは異なる。そのことは、*verblühen* と *verwelken* が共起する例によって示すことができる。両語の共起例をコーパスで検索すると (検索日：2019年12月25日；ヒット数：28件)、例えば次のような例が見つかる (31)。

- (31) Herschel untermauerte die Kantsche Vorstellung nun aber durch empirische Beobachtungen. Er verglich seine Weltbetrachtung mit einem Gang durch den Garten: Dort finden sich Pflanzen in verschiedenen Zuständen, mit Knospen, blühend, **verblüht**, **verwelkt** oder als fast totes Wurzelwerk. (Zeit Geschichte, 28.05.2019) Herschel はカント的な考えを、いまやしかし経験的な観察を通じて根拠づけていた。彼は自分の世界考察を、庭の散歩に例えた。そこには植物が様々な状態にある。つぼみを付けていたり、咲いていたり、咲き止んでいた (*< verblühen*)、しぼんでいた (*< verwelken*)、あるいはほぼ死んだ根っこ状態だったりする。

(31) において、*verblühen* は「しおれる・しぼむ」という意味を明らかに実現していない。仮に実現しているとしたら、*verwelkt* と全く同じ状態を表すことになり、様々な状態の例示という論旨と合わないからである。こうした例に鑑みると、*verblühen* の語義としては〈咲き止む〉というのが適切で、それが「し

18 同様のことは、比喩的な用法についても当てはまる：An einem Tisch drei Leute, ein Rocker, langes Haar, und ein Paar. Die beiden waren offensichtlich einmal hübsch, nun sind sie nicht nur **verblüht**, sie sind regelrecht **verwelkt**. Er trotz seiner Lederhaut noch leidlich rotblond, sie trägt die dünnen Haare schwarz gefärbt. (die tageszeitung, 27.07.2004)

おれる、しばむ」ことなのかどうかは文脈次第と言える。¹⁸

次に後半の「美しいもの、若々しいもの、力強いものの消滅を強調する」という点に関してだが、比較対象が本稿のそれと必ずしも一致しないので内容の当否を直接論じるのではなく、この指摘が連想を呼ぶ「ver- には否定的な評価の意味合いがある」という言説について論じる。例えば、Hundsnurscher (1997: 182) は、当該の終結 (terminativ) を表す ver- 動詞に関して次のように述べている (下線は引用者)。

- (32) 現代 [ドイツ] 語では、ver- 動詞と aus- 動詞の分化は通常次のようになっている。すなわち、ver- 動詞は、過程の否定的な negativ (退行的な deteriorativ) 側面を強調する一方、aus- 動詞は時間的に終わりに向かうことを中立的に表す。

しかし、否定的な評価というのは、次の2つの要因からくる副次的な効果であると考えられる。第1に、咲いていない状態への変化を含意する verblühen は、それを必ずしも含意しない、言い換えれば、(終局にあるとはいえ) なお咲いている状態を表し得る ausblühen (および abblühen) と異なる。咲いていない状態への変化は、通常否定的に捉えられるが故に、verblühen の方が、過程の否定的側面を強調し得る。第2に、ausblühen は咲くことをまっとうすることを表すが、verblühen (および abblühen) はそうとは限らず、非本来的な終わりを表すこともある。まっとうしないことは、通常否定的に捉えられる以上、verblühen の方が、同様に過程の否定的側面を強調し得る。

以上で、abblühen と ausblühen、ausblühen と verblühen の差異は明らかになった。残るは verblühen と abblühen の差異ということになるが、これに関してはすでにいくつか述べたので、それらを最後にまとめておく。両語は第1に、abblühen のみが〈咲き止む〉という sein 支配の語義の他に、〈咲き止むところである〉という haben 支配の語義を有する、という点で異なる。また〈咲き止む〉という語義に限定しても、abblühen は文脈によって「落花」の意味を実現するのに対し、verblühen は文脈によって「しばむ・しおれる」の意味を実現するという差異がある。¹⁹

¹⁹ 両語の間には aufblühen と erblühen に見られたのと並行するような差異が見られるのではないかも知想されるが、主語項の定性に鑑みても allmählich との共起に鑑みても、そのような差異の存在が示唆されることはなかった。

4. 前綴りの考察

本章では、前章で明らかになった差異を手がかりに、当該前綴を競合と対立という観点から考察する。

4.1. 競合関係

4.1.1. auf-, er-

当該の auf- と er- は共に、基盤動詞の動作相を継続相から開始相に変えている。それから傾向として、当該 auf- は「発展」の意味合いに、当該 er- は「出現」の意味合いに貢献していると言える。これは、当該 auf- には「開く」という具体的な意味が認められるのに対し、er- にはそれが認められないことに一部起因すると考えられる。何か「開く」際には、その何かは通常すでに存在していなくてはならないからである。

開始相化という機能における auf- と er- の競合は、aufblühen と erblühen 以外のケースでも広く見られることが知られている。aufblühen や erblühen と同様に過程の開始を表す自動詞に限定して言えば、次のような例が挙げられる (33)。²⁰

(33) a. 「光る」ことを表す基盤動詞からの派生動詞

aufglänzen – erglänzen / aufglimmen – erglimmen / aufglühen –
erglühen / aufscheinen – erscheinen / aufschimmern – erschimmern
/ aufstrahlen – erstrahlen

b. 「鳴る」ことを表す基盤動詞からの派生動詞

aufdröhnen – erdröhnen / aufhallen – erhalten / aufklingen
– erklingen

c. その他の基盤動詞からの派生動詞

aufbeben – erbeben / aufblühen – erblühen

国松他編 (1998) の記述に従えば、多くの競合例において、auf- 動詞が「急に、突然」という意味をむしろ担っていることになる。例えば (33a) の aufglänzen 「(急に) 輝き始める; (一瞬) ぱっと輝く」と erglänzen 「輝く、輝き出す、きらめく、ひらめく」、(33b) の aufklingen 「(突然) 響き始める、鳴り出す」と erklingen 「鳴り〈響き〉始める」、(33c) の aufbeben 「(突然短く) 振動する」

²⁰ (33) は Kühnhold/Wellmann (1973: 291f.) のカテゴリー設定および分類を出発点に、主に国松他編 (1998) に依拠して作成した。なお、Kühnhold/Wellmann (1973: 291f.) では、ここで挙げるよりも多くの例が挙げられているが、今日著しく一般的でない語に関しては紹介を省いた。

と erbeben「震える」といったように。²¹

先行研究には, aufblühen の auf- に対して, 後述の er- に対してと同様に, plötzlich を用いた言い換え (aufblühen = plötzlich blühen = erblühen) が可能とする文献もあるが (Kühnhold 1969: 331), 先述のように aufblühen が allmählich と問題なく共起する以上 (20), この見解には与することはできない。auf- は, 瞬間的な開始のマーカ―として機能する場合もあれば, そうでない場合もあると言える。Lechler/Roßdeutscher (2009: 463) も, auf- は「(緩やかな, ないし急な) 開始も, 出来事ないし状態の短い継続も共に示しうる」と述べている。上述の auf- に関しても, 実際にどの程度瞬間的な意味合いがあるのかは今後検証する余地があると思われる。

4.1.2. ab-, aus-, ver-

当該前綴は, 非有界な基盤動詞を有界に変える働きでは共通している (Zifonun/Hoffmann/Strecker 1997: 1865f.)。ver- の付与は常に変化動詞形成を引き起こすが, ab- と aus- の付与は終局表示を可能にするだけの場合もある。他にも, ab- は「分離・落下」という意味合いの実現を, ver- は「しほむ・しおれる」という意味合いの実現を可能にし, aus- は, 内在的な終点到達を表すことに貢献する。

終了相化において同様の3つの前綴りが競合する例には, 他にどのようなものがあるだろうか。網羅的なピックアップはまだできていないが, (33) の分類を手がかりに探すと, 例えば次が見つかる (34)。本稿の考察がこうした競合状況にどの程度当てはまるかを明らかにすることは, 今後の課題である。

(34) a. 「光る」ことを表す基盤動詞からの派生動詞

abglimmen – verglimmen – ausglimmen (古風) /

abglühen – verglühen – ausglühen

a. 「燃える」ことを表す基盤動詞からの派生動詞

abbrennen – verbrennen – ausbrennen

b. 「鳴る」ことを表す基盤動詞からの派生動詞

abklingen – verklingen – ausklingen

²¹ Duden (2014) ではこの点に関して, 特に erbeben において見解の相違が目立つ (下線部引用者)。aufglänzen (掲載なし), erglänzen (glänzend aufleuchten); aufklingen (plötzlich für kurze Zeit erklingen, zu klingen beginnen), erklingen ([als melodischer Klang] hörbar werden); aufbeben (掲載なし), erbeben (plötzlich u. heftig zu beben anfangen [...])

c. その他の基盤動詞からの派生動詞

abblühen – verblühen – ausblühen

4.2. 対立関係

開始相の前綴と終了相のそれとを多対多で比べると, Stiebels (1996: 77) の言うような開始相表示と終了相表示の非対称が, blühen 群でも見られる点がまず指摘できる。開始相は, auf- と er- にしか分かれていないのに, 終了相の方は, ab-, aus-, ver- の3つに分かれている。²² また, それと合わせて, 開始相と終了相の意味的な分化の仕方も非対称的である。開始相では傾向として, 「発展」(auf-) か「出現」(er-) かという点で分化が認められたのに対し, 終了相では, 一方では, 変化を常に含意する ver- と, それを必ずしも含意しない ab- と aus- とに分かれ, 他方では, 中断としての終了を表しうる ab-, ver- と, まっとうとしての終了しか表さない aus- とに分かれる。

発展か出現かという分化が終了相に見られないのは, 終了相において対象は常に既存であることが関与していると考えられる。他方で, 変化の有無という基準による分化が開始相に見られないのは, 「有になるところの無」といったものを(それが無である以上)把握できないことに, 内在的な終点を基準にした分化が開始相に見られないのも同様に, 「有になるのを中断した無」といったものを把握できないことに根拠を持つと考えられる。

次に両相の前綴を一对一で比較する。例えば Dewell (2015: 236f.) や Agricola/Agricola (1982: 97, 242) は, er (blühen) と ver (blühen) が対称的である, 対義語であると見なしている。しかし, er- においては過程への注目が起こり難いが (3.1), 他方の ver- においてはそうではない。verblühen と allmählich の共起する例をコーパスで検索すると (検索日: 2019年12月20日; ヒット件数: 10件; 有効データ: 6件), (35) のように比喩的用法とはいえ過程への注目の明らかな例が見つかる。²³

²² 開始相の表現としては, 先述のように anblühen や entblühen もないわけではないが, 今日では aufblühen と erblühen に駆逐されていると言える。

²³ anfangen と共起することなどから, verblühen を Accomplishment 動詞 (過程を含意する変化動詞) と見なしていると解される文献もある (Nicolay 2007: 44ff.)。verblühen が過程を含意するという点は賛同できるが, その根拠をなすテストの有効性については疑問の余地がある。というのも, 実際には Achievement 動詞であっても anfangen や beginnen と共起することは可能と言えるからである。典型的な Achievement 動詞とされる finden 「見つける」の実例: Plötzlich hörte ich auf zu suchen und begann zu finden: mich selbst. (<https://peterjanki.com/peterjanki/>, 最終アクセス: 2020年1月24日)

- (35) Marion war einmal eine Schönheit gewesen. Doch im Laufe der Jahre war sie allmählich **verblüht**, und der Rotwein hatte ihrem Gesicht seine Farbe anvertraut. (die tageszeitung, 24.12.2010) Marion は、昔は美人だった。しかし年月の流れの中で徐々に咲き止み [< allmählich verblühen], ワインの色が顔について [ワインの飲み過ぎで顔色が悪くなって] しまっていた。

よって er- と ver- は厳密には対称的とは言えない。当該 ver- と対称的なのはむしろ auf- であると考えられる。blühen 群の使用頻度の分布からも、この考えは支持される。

なお abblühen に関しても同様に、allmählich と共起する例を調べてみたが (検索日: 2019年12月20日; ヒット件数: 2 件), 有効データは 0 件となった。これはしかし、abblühen が頻度の低い表現であることに起因する可能性がある。したがって、ab- が auf-, er- のどちらと対称か現時点では判断できない。²⁴ 残る aus (blühen) に関しても同様である。²⁵

5. 展望

次に取り組むべき諸課題のうち、blüh- 群と同じ前綴分布を示す同語幹動詞群の分析にとりわけ関心を引かれる。具体的には、glimmen 群, glühen 群, klingen 群のことである。²⁶ それらの同語幹動詞群において、意味の分化状況はどのようになっている、それはどの程度 blühen 群と共通するのだろうか。それを明らかにすることで、ドイツ語の造語論の根本問題の 1 つである「接頭辞と不変化詞の競合」の解明に、さらに寄与できると考える。

²⁴ abblühen は、例えば beginnen と共起し得るが (Der Raps beginnt abzublühen. (Nordkurier, 01.06.2010)), 上の註で述べたようにこのテストの有効性には疑問の余地があり、abblühen を Accomplishment 動詞と見なす根拠とは言えない。

²⁵ ausblühen が allmählich と共起する例をコーパスで検索しても (検索日: 2019年12月20日; ヒット件数: 5 件), 有効データは 0 件となる。

²⁶ klingen 群において、anklingen が開始相表現であるかのように言われることもあるが、この点は疑問の余地が大きい。ここで詳述することはできないが、klingen 群も blühen 群等と同列に扱えると考えている。

文献表

- 国松孝二 他編 (1998):『独和大辞典』, 第2版, 小学館.
- 相良守峯 (1978):『大独和辞典』, 第25版, 博友社.
- 佐藤通次 (1982):『独和言林』, 白水社.
- Admoni, Wladimir (1982) : *Der deutsche Sprachbau*, 4., überarbeitete und erweiterte Aufl., München: Verlag C.H. Beck.
- Agricola, Christiane / Agricola, Erhard (1982) : *Wörter und Gegenwörter: Antonyme der deutschen Sprache*, Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
- Benoist, Stéphanie (2011) : Verbale Derivationsmechanismen am Beispiel von *auf-* und *er-*, in: Kauffer, Maurice / Métrich, René (Hgg.) : *Verbale Wortbildung im Spannungsfeld zwischen Wortsemantik, Syntax und Rechtschreibung*, 2. Aufl., Tübingen: Stauffenburg Verlag, 145-156.
- Brinkmann, Hennig (1971) : *Die deutsche Sprache: Gestalt und Leistung*, 2., neubearbeitete und erweiterte Aufl., Düsseldorf: Pädagogischer Verlag Schwann.
- Bußmann, Hadumod (2008) : *Lexikon der Sprachwissenschaft*, 4., durchgesehene und bibliographisch ergänzte Aufl., unter Mitarbeit von Hartmut Lauffer, Stuttgart: Alfred Kröner Verlag.
- Dewell, Robert B. (2015) : *The Semantics of German Verb Prefixes*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Duden 4 (2009) : *Die Grammatik: Unentbehrlich für richtiges Deutsch*, 8., überarbeitete Aufl., Berlin: Dudenverlag.
- (2014) : *Die deutsche Sprache: Wörterbuch in drei Bänden*, Bd. 1-3, Berlin/Mannheim/Zürich: Dudenverlag
- DWB = *Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm*, München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1984.
- Eberhard, Johann August (1982 [1910]) : *Synonymisches Handwörterbuch der deutschen Sprache*, 17. Aufl., durchgängig umgearbeitet, vermehrt und verbessert von Otto Lyon, Tokyo: Sansyusya [Leipzig: Th. Grieben's Verlag] .
- Erben, Johannes (1972) : *Deutsche Grammatik: Ein Abriss*, 11., völlig neubearbeitete Aufl., München: Max Hueber Verlag.
- (2006) : *Einführung in die deutsche Wortbildungslehre*, 5., durch-

- gesehene und ergänzte Aufl., Berlin: Erich Schmidt Verlag.
- Fleischer, Wolfgang / Barz, Irmhild (2012) : *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*, 4. Aufl., völlig neu bearbeitet von Irmhild Barz unter Mitarbeit von Marianne Schröder, Berlin: De Gruyter.
- Goergen, Pascal (1994) : *Das lexikalische Feld der deutschen inchoativen Verben*, München: iudicium verlag.
- Hundsnurscher, Franz (1997) : *Das System der Partikelverben mit aus in der Gegenwartssprache*, Hamburg: Helmut Buske Verlag.
- Kühnhold, Ingeburg (1969) : Über das Verhältnis von *auf-* und *er-*, in: Erben, Johannes / Thurnher Eugen (Hgg.) : *Germanistische Studien*, Innsbruck, 327-335.
- Kühnhold, Ingeburg / Wellmann, Hans (1973) : *Deutsche Wortbildung, Typen und Tendenzen in der Gegenwartssprache, Erster Hauptteil: Das Verb*, Düsseldorf: Pädagogischer Verlag Schwann.
- Lechler, Andrea / Roßdeutscher, Antja (2009) : German Particle Verbs with *auf*: Reconstructing their Composition in a DRT-based Framework, in: Grewendorf, Günther / von Stechow, Arnim (2009) : *Linguistische Berichte*, Hamburg: Helmut Buske Verlag, 439-478.
- Lewandowski, Theodor (1984) : *Linguistisches Wörterbuch 1*, 4., neu bearbeitete Aufl., Heidelberg: Quelle & Meyer.
- Mater, Erich (1967) : *Deutsche Verben 2: Grundwörter und deren Zusammensetzungen*, Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
- Nicolay, Nathalie (2007) : *Aktionsarten im Deutschen: Prozessualität und Stativität*, Tübingen: Niemeyer.
- Ogawa Akio / Rusterholz, Andreas (2011) : Das Präfix *ver-*: eine Herausforderung für Deutschlernende?, in Barkowski, Hans et al. (Hgg.) (2012) : *Zielsprache Deutsch 38*, 2, Tübingen: Stauffenburg, 27-36.
- Rich, Georg A. (2003) : *Partikelverben in der deutschen Gegenwartssprache mit durch-, über-, um-, unter-, ab-, an-*, Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Sanders, Daniel (1968 [1876]) : *Wörterbuch der deutschen Sprache*, 2., unveränderter Abdruck, Tokyo: Sansyusya [Leipzig: Verlag von Otto Wigand] .
- (1924) : *Handwörterbuch der deutschen Sprache*, 8., neubearbeitete und vermehrte Aufl. von I. Ernst Wülfing, Leipzig: Bibliographische Institut.

- Stiebels, Barbara (1996) : *Lexikalische Argumente und Adjunkte: Zum Semantischen Beitrag von verbalen Präfixen und Partikeln*, Berlin: Akademie Verlag.
- Storch, Günther (1978) : *Semantische Untersuchungen zu den inchoativen Verben im Deutschen*, Braunschweig: Vieweg.
- Wahrig (2011) : *Deutsches Wörterbuch*, 9. vollständig neu bearbeitete und aktualisierte Aufl., Gütersloh/München: Wissenmedia.
- Zifonun, Gisela / Hoffmann, Ludger / Strecker, Bruno (1997) : *Grammatik der deutschen Sprache*, Bd. 3, Berlin / New York: Walter de Gruyter.

ドイツ語の不定詞名詞化における 項の義務性・非義務性 —非明示的な項の解釈について—

Obligatorik/Fakultativität von Argumenten der Infinitivnominalisierungen im Deutschen
— Zu Interpretationen der impliziten Argumente —

小林 大志

東京外国語大学大学院特別研究員

Taishi KOBAYASHI

Tokyo University of Foreign Studies, Special Research Fellow

Abstract

Der vorliegende Beitrag befasst sich mit der argumentstrukturellen Eigenschaft der deutschen Infinitivnominalisierung. Während die älteren Forschungen (cf. Bierwisch 1989, Ehrich & Rapp 2000) von grundsätzlich fakultativen Argumenten bei der Nominalisierung ausgegangen sind, haben Blume (2004) und Bücking (2010) darauf aufmerksam gemacht, dass Infinitivnominalisierungen über obligatorische Argumente verfügen können. Weil die auf den ersten Blick widersprüchlichen Ansichten beide überzeugend scheinen, lässt sich die Frage stellen, ob und wie sich die zwei Ansichten miteinander vereinbaren lassen.

Mit Berücksichtigung von unterschiedlichen Interpretationen der implizierten Argumente — bei *ung*-Nominalisierungen unterscheiden sich mindestens zwei Interpretationen: individuelle und existenziale Lesart — wird in diesem Beitrag die Ansicht vertreten, dass es bei der Frage nach der Obligatorik/Fakultativität von Argumenten darum geht, welche Interpretationen die implizierten Argumente haben können. Aus der kritischen Auseinandersetzung mit den von Blume (2004) und Bücking (2010) angegebenen Daten ergibt sich, dass bei Infinitivnominalisierungen die Möglichkeit der individuellen Lesart der implizierten Argumente eingeschränkt ist, während die existenziale Lesart derselben nicht ausgeschlossen ist.



1. はじめに

動詞の名詞化（以下、名詞化）は、ドイツ語を対象とした言語研究において従来から盛んに議論されてきたテーマであり、名詞化に関する先行研究は Ullmer-Ehrich (1977), Bierwisch (1989), Ehrich (1991), Ehrich & Rapp (2000), Bücking (2012) など数多い。これらの研究における主要な問いのひとつが、名詞化が、基盤動詞から何らかの形で「継承」した項構造を持っているのかどうか、また、この「継承」がいかなる形でなされるのかという名詞化の項構造を巡る問いである。

名詞化の項構造を巡る議論では、名詞化の形態論的な種別の違いと項構造の関係がしばしば注目される。ドイツ語の名詞化は、派生接尾辞を付加したり、動詞語幹を抽出したり、あるいは語幹を変音したりといった手続きにより形態論的にマークされる派生名詞化 (e.g. *behandeln* > *Behandlung*, *schlagen* > *Schlag*, *treten* > *Tritt*) と、動詞の不定詞をそのまま中性名詞として用いる不定詞名詞化 (e.g. *behandeln* > *das Behandeln*, *schlagen* > *das Schlagen*, *treten* > *das Treten*) に大別される。派生名詞化はさらに分類することができるが、代表的なのは接尾辞 *-ung* を付与する *ung* 名詞化である。項構造との関連では、Blume (2004) により指摘された不定詞名詞化と派生名詞化の項の表示義務の違いが重要である。Blume (2004) 以前の研究では、名詞化の項は基盤動詞の項とは異なり一般に義務的でないと想定されていたのに対し (cf. Bierwisch 1989, Ehrich & Rapp 2000), Blume (2004) は大規模なアンケート調査に基づく実証的研究を通じて、(1) に示すように、不定詞名詞化が義務的な項を持つと指摘した。

(1) F: In eurem Viertel wird doch dauernd eingebrochen. Wollt ihr euer Haus trotzdem leer stehen lassen, wenn ihr in Urlaub seid?

A: Sicher machen wir uns Sorgen um unser Haus. Wir haben eine Firma mit dem Überwachen^{??}(des Hauses) /mit der Überwachung^{OK}(des Hauses) für die Urlaubszeit beauftragt.¹

F: 君たちの地域では空き巣が続いています。それでも休暇に行くのに家を

¹ この例は Blume (2004: 120) の例49を参考に、括弧内の要素を筆者が補充したものである。その際、容認度について改めて2名のインフォーマント（ともにノルトライン・ヴェストファーレン州出身の20代男性）に質問し、不定詞名詞化で括弧内の要素が義務的であることを確認した。また、本稿で挙げる例の容認度は、先行研究からの引用を除き、すべてこの2名のインフォーマントの判断による。

留守にしたいですか？

A: もちろん家のことは心配です。この休暇中は業者に（家の）警備を依頼しました。

一方、名詞化の項が一般に義務的でないという Blume (2004) 以前の研究の想定も、一定の妥当性を持っているように思われる。(2) のような実例が認められることから、不定名詞化だからといって、必ずしも項が明示されなくてはならないというわけではなさそうである。

(2) Weil die Kameras so klein sind, sind sie **zum Überwachen** natürlich perfekt geeignet. (Die Zeit, 08.11.2011)²

それらのカメラはとても小さいので、監視するにはもちろん完璧に適している

本稿では、名詞化の非明示的な項の解釈が一樣ではないことに注目することで、この一見して矛盾するよう見える 2 つの観察が両立することを示し、2 つの観察の関係を明らかにするための意味論的研究の筋道を示す。

本稿の構成は以下の通り：1. はじめに；2. 名詞化の項に関する略説；3. Blume (2004) の観察と非明示的な項の解釈パターン；4. Bücking (2010) の観察と名詞化の「特定解釈」と「総称解釈」；5. 名詞化の種類と指示的性質；6. まとめ。

2. 名詞化の項に関する略説

2.1. 項と項構造

項 (Argument) は、述語論理的な意味での「述語 (Prädikat)」と対立する概念である。例えば、(3a) の文では *prüfen* という述語が *Paul* と *Peter* という 2 つの項をとっていると考えることができる。この関係は、(3b) のように記述することができる。

- (3) a. Peter prüft Paul. ペーターがパウルをテストする
b. PRÜFEN (Peter, Paul)

² 本稿で挙げるコーパスの例の強調、省略、改変はすべて筆者による。

項構造 (Argumentstruktur) は、ある述語がとる項の数と種類を定める。³ (3b) の関係を (3a) の文における動詞 *prüfen* の意味形式 (semantische Form) と考えると、*prüfen* の項構造は (3b) の Peter と Paul に対応すべき変数とみなすことができる。そこで、(3b) の Peter と Paul を x および y と置き、それぞれを λ 演算子で束縛すれば、*prüfen* の項構造と意味形式は (4) のように記述することができる。

$$(4) \textit{prüfen}: \underbrace{\lambda y \lambda x}_{\text{項構造}} \quad \underbrace{[\text{PRÜFEN}(x, y)]}_{\text{意味形式}}$$

2.2. 状況項・主題項・指示項

ここでは動詞の項構造に、主語や目的語として統語的に表される項 (主題項) に加えて、状況に対応する状況項が含まれると考える (cf. Davidson 1967)。(5a) では s が状況項である。状況項は主語や目的語のような補足語としてではなく、法・時制を通じて実現され、(5b) のような平叙文では (5c) のように存在量化される。

- (5) a. *arbeiten*: $\lambda x \lambda s [\text{ARBEITEN}(x)(s)]$
 b. Peter arbeitet. ペーターが働いている
 c. $\exists s [\text{ARBEITEN}(\text{Peter})(s)]$

状況項を仮定する利点のひとつは、様態や場所の副詞規定の解釈が容易となることである。(6a) において、*langsam* と *im Garten* は「ペーターが働いている」という状況を修飾しているとみるのが直観的な解釈であるが、状況項を設けない場合、これらの副詞規定はいったい何を項とする述語とみなせばこの解釈を得られるのかという問題に直面する。状況項を仮定することで、どちらの副詞規定も状況項についての述語と分析することで、直観に合う (6b) の意味形式が得られるのである。

- (6) a. Peter arbeitet langsam im Garten. ペーターは庭でゆっくり働いている
 b. $\exists s [\text{ARBEITEN}(\text{Peter})(s) \& \text{LANGSAM}(s) \& \text{IM-GARTEN}(s)]$

³ 項構造という用語は生成文法において提唱されたものだが、概念としてはルシアン・テニエール (cf. Tesnière 1959) が提唱した結合価 (Valenz) と同じものである。

状況項は名詞化においても重要な役割を果たす。一般に「述語」というとまず動詞が連想され、名詞は「項」としての側面が想起されるが、厳密には動詞の項となるのは名詞「句」であって名詞ではない。*Peter*などの固有名詞を別とすれば、名詞はそれ自体としては述語であり、個体が属するカテゴリー、別の言い方をすれば「個体の集合」を表している。例えば *Hund* の場合、「犬」というカテゴリー、すなわち「犬の集合」を表す述語とみなすことができ、形式的には (7) のように記述できる。(7) の項 r は名詞句の指示対象に対応することから指示項と呼ばれる (cf. Williams 1981)。指示項が t 演算子で束縛されることで、*der Hund* のような定の名詞句 (cf. (7)) は、「犬」というカテゴリーに属す文脈で唯一の個体を外延とする表現となる。

(7) *Hund*: λr [HUND(r)]

- (7) a. Der Hund bellt. 犬が吠えている
b. $\exists s$ [BELLEN(t_r [HUND(r)])(s)]

名詞化では、基盤動詞の意味形式がそのまま名詞化の意味形式となると考える (cf. Bierwisch 1989, Ehrich 1991)。(8) では、(5a) に示した *arbeiten* の意味形式がそのまま *Arbeit* の意味形式となっている。基盤動詞の状況項は、名詞化の指示項として振る舞う。つまり、(8) において s は *Arbeit* の指示項である。

(8) *Arbeit*: $\lambda x \lambda s$ [ARBEITEN(x)(s)]

Hund など個体の種類を表す種族名詞の項構造が指示項のみからなるのに対し、名詞化の項構造には指示項だけでなく、基盤動詞の主語や目的語に対応する主題項も含まれる。(8) では、*arbeiten* の主語となる x が *Arbeit* の項となっている。名詞化の主題項は属格などの形で実現される (基盤動詞の主題項が名詞化の項となる仕組みについては小林 (2020) を参照)。最終的に、(9a) の名詞句には (9b) の意味形式が対応する。

- (9) a. die langsame Arbeit Peters im Garten 庭でのペーターのゆっくりとした仕事
b. t_s [ARBEIT(Peter)(s) & LANGSAM(s) & IM-GARTEN(s)]

2.3. 名詞の項と付加語の峻別

一般に、動詞の項は義務性を基準として付加語と区別される。例えば、*Paul prüft Peter in Biologie* という文において、項である *Peter* は義務的であり、付加語である *in Biologie* は義務的ではない (cf. (10))。

- (10) a. Paul prüft * (Peter) in Biologie. Peter は項
 b. Paul prüft Peter ^{OK} (in Biologie). in Biologie は付加語

一方、名詞の項は、本稿が論じるように不定詞名詞化に関して議論の余地があるものの、(11) の *Peters* が義務的でないように、少なくとも一般に義務的であるということはない。そのため、名詞の項と付加語の峻別には義務性とは別の基準が必要である。

- (11) Die Prüfung ^{OK} (Peters) dauert noch an. (ペーターの) テストはまだ続いている

紙幅の都合から、ここでは名詞の項の種類を属格項に限定する。ドイツ語において属格は、名詞の項の表示に用いられると同時に、所有者を表す付加語としても用いられる。そのため、ある属格が項なのか付加語なのかは一見しただけではわからない。

- (12) a. Die Behandlung des Patienten dauert noch an. 患者の処置はまだ続いている
 b. Der Computer des Studenten ist kaputt. その学生のコンピューターが壊れた

属格項と属格付加語の峻別を巡り、Hartmann & Zimmermann (2003) は、*Ulfs* のような2音節以下の固有名詞の無冠詞の属格が、項の場合には主要部に後置できるのに対し、付加語の場合には後置できず、主要部に前置されるという観察を示している。

- (13) a. Die Behandlung Ulfs dauert noch an. ウルフの処置はまだ続いている
 b. *Der Computer Ulfs ist kaputt.
 b'. Ulfs Computer ist kaputt. ウルフのコンピューターが壊れた

そのため、Hartmann & Zimmermann (2003) に従うならば、属格項と属格付加語は、*Ufs* のような無冠詞で2音節以下の固有名詞で置き換えても主要部に後置することができるかどうかという基準によって峻別することができよう。

(14)/(15) に示すように、他動詞の名詞化では、意味の種類異なる様々な動詞の名詞化で、基盤動詞の対格目的語が属格項となる。⁴ この観察から、他動詞の名詞化では原則として基盤動詞の対格目的語が項になると考えられる。⁵

- (14) a. In einer Erklärung bezeichnete die Splitterorganisation **die Erschießung Wrights** als Reaktion auf den „anhaltenden Völkermord an Nationalisten“ in Nordirland. (Berliner Zeitung, 29.12.1997)

声明において、その派閥組織はライトの射殺を北アイルランドにおける「絶え間ない国家主義者への虐殺」に対する反応と表現した

- b. Maik W. soll **die Verfolgung Maschs** befohlen haben, der in einem Rapsfeld zu entkommen versuchte. (Berliner Zeitung, 12.02.2003)

マイク W. は菜の花畑で逃げようとしたマッシュの追跡を命じたそうだ

- c. **Der Verlust Schiebers** bedeutet für den Club [...] einen herben Dämpfer. (Die Zeit, 25.02.2011)

シーバー選手を失ったことは、そのクラブにとって痛手である

- (15) a. Der Kampf endete [...] **mit dem Erschießen Moras**. (Wintzer, Wilhelm: Die Deutschen im tropischen Amerika)

その争いはモーラを射殺することで終わった

- b. Peter Horst Neumann ist **beim Lesen Lessings** etwas aufgefallen, daß nämlich in beinahe allen Theaterstücken Väter eine wichtige, das Geschehen und den gedanklichen Konflikt bestimmende Rolle spielen. (Die Zeit, 27.01.1978, Nr. 05)

ペーター・ホルスト・ノイマンはレッシングを読んでいて、ほとんどす

⁴ 例外として、*Schlag* や *Warnung* といった名詞化では基盤動詞の目的語が属格項とならない。その背景については、Kobayashi (2017) を参照されたい。

⁵ もっとも、基盤動詞によっては選択制限のため、対格目的語が固有名詞であり得ないことがある。例えば *abfassen* 「作成する」の目的語は「記事・手紙」などの文書なので固有名詞となることは考え難い。そのような動詞の名詞化には固有名詞での置き換えテストを適用できないが、本稿では (13)/(14) のデータからの類推により、*abfassen* のような動詞でも対格目的語が名詞化の項となると考える。

すべての戯曲で父親たちが重要な、出来事と心的葛藤を決定づける役割を演じていることに気がついた。

- c. Die Kramer-Rezeption – und das heißt: **das Vergessen Kramers** – offenbart [...] das Scheitern einer auf das Allgemeine zielenden Kritik vor einer Literatur des Besonderen. (Die Zeit, 07.10.1983, Nr. 41)

クラマーの受容―そしてすなわち、クラマーが忘れられたこと―は、特別な文学を前にして一般性を目指した批評がうまく行かなかったことを意味している。

以下の議論はすべて基盤動詞の対格目的語にあたる項を問題とする。そのため、以下では基盤動詞の対格目的語にあたる項を単に「名詞化の項」と呼ぶ。

3. Blume (2004) の観察と非明示的な項の解釈パターン

3.1. 実証的アンケート調査により示された不定詞名詞化の項の義務性

Blume (2004) は、180名のドイツ語母語話者を対象として実施した大規模なアンケート調査の結果に基づく実証的な研究である。この調査は、被験者が例文を5段階（1：「書き言葉として可」、2：「話し言葉として可」、3：「誤りに聞こえるが、耳にすることもある」、4：「明らかに誤り」、5：「理解できない」）で評価した上で、1以外の評価を行う際には違和感を覚える表現を下線でマークするという手法で行われた。調査は3回に分けて実施され、第1回目では判断対象の例文のみが提示され、第2回目と第3回目では判断対象の例文に加えて、それに先行する疑問文の形で文脈も提示された。なお、例文の25%は名詞化を含まないフィラーである。(16)は、Blume (2004) が調査に用いた質問票（第2回、第3回）と回答形式のサンプルである。

(16) Blume (2004) の調査票と回答形式

Beispiel 1	F:	Was halten Sie vom System der Mülltrennung und Wiederverwendung?					
	A:	Ich halte es für fraglich, ob solche Maßnahmen wirklich dem Umweltschutz dienen.	✗	2	3	4	5
Beispiel 2	F:	Kommt Ihre Freundin heute nicht?	1	2	3		
	A:	Möglicherweise hat <u>sie wieder einmal vergessen</u> .				✗	5
Beispiel 3	F:	Sie wohnen doch in Brühl. Was sagen Sie zum Fall Kaplan?	1	2	3	4	
	A:	<u>Der Mord der unschuldigen Kinder</u> hat mich sehr schockiert.					✗

収集されたデータのうち、1以外の評価がなされたものに関して、Blume (2004) は、被験者が違和感を覚えた箇所を示す下線が名詞化またはその項に引かれている回答のみを有効回答とみなしている。回答はコンピューターで集計され、最終的に、有効回答の評価平均が1.0–1.4の例が「容認」、1.5–1.7の例が「やや逸脱」、1.8–2.9の例が「かなり逸脱」、2.9以上の例が「非文法的」と判断された。最終的な評価を4段階としているのは表現の容認度を4段階で評価する言語学の慣例に従ったものとのことなので、以下ではこの慣例にならない、「やや逸脱」を?, 「かなり逸脱」を??, 「非文法的」を*で表示する。また、「容認」についてもOKで表示する。

Blume (2004) の調査では、(17) にまとめるように、項の明示されない不定詞名詞化が、同じ基盤動詞に由来し、やはり項の明示されない *ung* 名詞化と対比されている。この調査では、不定詞名詞化が一貫して「かなり逸脱」と評価されたのに対し、*ung* 名詞化については「容認」という結果が示された。この調査結果から、Blume (2004) は「不定詞名詞化は項が義務的である」という結論を導いている。

- (17) a. F: In euerm Viertel wird doch dauernd eingebrochen. Wollt ihr euer Haus trotzdem leer stehen lassen, wenn ihr in Urlaub seid?
 A: Sicher machen wir uns Sorgen um unser Haus. Wir haben eine Firma ^{??}mit dem Überwachen/^{OK}mit der Überwachung für die Urlaubszeit beauftragt.
 F: 君たちの地域では空き巣が続いています。それでも休暇に行くのに家を留守にしたいですか?
 A: もちろん家のことは心配です。この休暇中は業者に警備を依頼しました。
- b. F: Hatten Sie auch schon mal einen Autounfall?
 A: Ja, ich bin einmal in den Anhänger eines Glasers gefahren. Die Straße war so mit Scherben übersät, dass ^{??}ein Sperren/^{OK}eine Sperrung für mehrere Stunden erforderlich war.
 F: 自動車事故を起こしたことはありますか?
 F: はい、ガラス店のトレーラーに車で突っ込んだことがあります。道路が破片で埋め尽くされてしまって、何時間か通行止めが必要になりました。
- c. F: Wird die andere Gruppe nicht sauer, wenn sie uns den Raum überlassen muss?
 A: Ja, aber ich finde, ^{??}ein Räumen/^{OK}eine Räumung für zwei

Stunden ist noch zumutbar.

F: 部屋を譲らなければならないとなると、他のグループが怒りませんか？

A: 怒るでしょうが、2時間に限って部屋を空けるならば妥当だと思います。

3.2. 非明示的な項の個体的解釈と量化的解釈

Blume (2004) の観察に関係して、項が明示されていない名詞化の実例において、項の解釈が一様ではないことに注目したい。*ung* 名詞化の場合、項が統語的に明示されていないケースでは、少なくとも2通りの解釈パターンが区別できそうである。すなわち、①その項を文脈や世界知を通じて与えられる個体とする解釈（個体的解釈）と、②項を任意の存在として曖昧なままとする解釈（量化的解釈）である。例えば (18a) は個体的解釈、(18b) は量化的解釈に該当する。(18a) では、射殺されたのが「メキシコ皇帝マキシミリアン」であることが文脈と世界知から読み取れるのに対し、(18b) は「射殺」という行為についての一般論であるから、射殺の対象は任意の存在である。

- (18) a. Manet hat das Bild 1868 gemalt, ein Jahr **nach der Erschießung** am 19. Juni 1867. (Die Zeit, 29.06.2017, Nr. 24)

マネは1868年にその絵（「皇帝マキシミリアンの処刑」）を描いた。
1867年6月19日の射殺の一年後だ

- b. **Die Erschießung** ist ja keine Strafe und schon gar nicht die Höchststrafe: (Berliner Zeitung, 24.03.2003)

射殺は刑罰ではないし、最高刑ではまったくない

Erschießung の指示項の扱いについてはひとまず置いておくこととすれば、(18a) の個体的解釈は *erschießen* の目的語に個体 Maximilian を代入した (18'a) の意味形式、(18b) の量化的解釈はこの項を存在量化した (18'b) の意味形式で表すことができる。⁶

- (18') a. λs [ERSCHIESSEN(x , Maximilien) (s)]

- b. $\lambda s \exists y$ [ERSCHIESSEN(x , y) (s)]

Blume (2004) が調査した (17) の例は、どれも、非明示的な項に対応する個体を文脈から容易に推測できそうな例である。例えば、(17a) の *Überwachen/Überwachung* 「見張り」が「(発言者の) 自宅を見張ること」であることは文脈

から明らかであるし、(17b) の *Sperren/Sperrung* 「封鎖」も「破片だらけになってしまった道路を封鎖すること」であることは自明である。(17c) についても、直前に *den Raum überlassen* 「その部屋をゆずる」とあることから、*Räumen/Räumung* 「退却」は「その部屋から退却すること」だとわかる。つまり (17) の例は、どれも潜在的に個体的解釈の可能性がある例である。したがって、(17) に名詞化の種類による容認度の違いが見られるという観察は、非明示的な項の個体的解釈の可能性に名詞化の種類による違いがあり、不定詞名詞化が非明示的な項の個体的解釈に制約を抱えていることを示唆している。もっとも、Blume (2004) の観察は限られた名詞化しか扱っていないので、この制約の不定詞名詞化全般への一般化には留保が必要である。また、非明示的な項に対応する個体の情報がどのようにして与えられているか、その個体がどの程度特定されているかといったことも考慮に入れる必要があるかも知れない。

一方、非明示的な項の他の解釈の可能性、特に *ung* 名詞化で可能な量化的解釈の可能性については、Blume (2004) の観察からは読み取ることはできない。しかし、実例を観察すると、不定詞名詞化の項が明示されず、任意の存在として量化的に解釈される例は容易に見つけることができる。例えば、(19) の *Zerstören* は項が明示されていないが、意図されているのは「(ゲームの中で) 様々なものを破壊する行為」であり、破壊の対象は任意の存在である。

(19) Sobald er merkt, dass er zu viel Spaß am **Zerstören** hat, lässt er die

⁶ (18') では *x* が λ 演算子で束縛されていない。これは、i. に示すように、2 音節以下の無冠詞固有名詞が、*erschießen* の主語に対応するものとしては、通常、*Erschießung* の後置属格として認められないという観察を反映している (cf. Ehrich&Rapp 2000, Hartmann&Zimmermann 2002)。

i. Die **Erschießung** Hugos erfolgte sofort.

フーゴの射殺 [= (誰かが) フーゴを射殺すること / ≠ フーゴが (誰かを) 射殺すること] は直ちに行われた。

この *x* は、ii. のように文脈や世界知に照らして解釈されるか、iii. のように不定のものとして解釈される。 λ 演算子で束縛されない変項の地位については Steinitz (1992) を参照されたい。

ii. [Sirhan Bishara Sirhan] wußte, daß er durch die **Erschießung** Kennedys nicht die Lieferung von Phantom-Düsenjägern an Israel verhindern konnte, (Die Zeit, 25.04.1969)
サーハン・ベシハラ・サーハンは (彼が) ケネディを射殺してもジェット戦闘機ファントム II のイスラエルへの供給を防ぐことはできないとわかっていた

iii. 1948 schrieb Pemán, keine öffentliche Instanz habe mit der **Erschießung** Lorcas zu tun gehabt: (Die Zeit, 11.06.1976)

ペマンは1948年に、ロルカ (銃殺の経緯がわかっていないスペインの詩人) の銃殺に公的機関は関与していなかったと記している

Finger von einem Spiel. (Die Zeit, 02.06.2017)

破壊することに過度の楽しみを覚えていると感じると、彼はすぐに（暴力的だと非難を集めている）ゲームで遊ぶことから距離を置く

(19) のような実例が容易に見つかることは、不定詞名詞化でも非明示的な項の量化的解釈が認められていることを示唆している。

4. Bücking (2010) の観察と名詞化の「特定解釈」と「総称解釈」

4.1. Bücking (2010) の主張と根拠となるコーパスデータ

Bücking (2010) は、IDS が公開するドイツ語代表コーパス DeReKo とコーパス検索システム COSMAS 2 を利用したコーパス調査ならびに自身の内省から不定詞名詞化の項の振る舞いについて論じている。なお、Bücking (2010) のコーパス調査では、後置属格に加えて、前置属格と von 前置詞句が名詞化の項として扱われている。

Bücking (2010) の主張の要点は (20) にまとめられる。

(20) Bücking (2010) の主張

- a. 不定詞名詞化の項の義務性を決定するのは、①基盤動詞における項の義務性と②名詞化の「特定解釈」と「総称解釈」の違いである。⁷
- b. ②について、「特定解釈」の不定詞名詞化では（基盤動詞において義務的な）項が義務的なのに対し、「総称解釈」では項の表示義務が弱まる。

このうち①で意図されているのは、(21) に示すように基盤動詞の義務的でない項が名詞化においても義務的でないというもったもなし指摘である。他方、「特定解釈」と「総称解釈」に関係する②については検討が必要である。

- (21) a. Mit aggressiverer Defense [...], **einem früheren Stören (des Gegners)** und der besseren Abschirmung des treffsicheren USC-Spielers Warmsley [...] drehten die Langener den Spieß herum. (Frankfurter Rundschau, 20. 9. 1993, Bücking (2010: 41) より引用)
より攻撃的なディフェンス、より早い相手選手の妨害、そしてシュート

⁷ 後述するように、Bücking (2010) の「特定解釈」と「総称解釈」は文法的なカテゴリーではなく、言語外世界の在り方に関わるカテゴリーである。このことを明示するため、本稿ではこの2つをカギ括弧に入れて表記する。

の正確な USC のワームズリー選手をうまくブロックすることで、ランゲンは攻勢に転じた

b. „Wir **stören** vielleicht“, ruft Emma, als sie ins Haus traten. (Schumacher et al. 2004: 706)

「お邪魔するかもしれません」と、家に入るとエマは言う

Bücking (2010:70, 脚注35) は、「当該の状況が時間的・空間的に定位できるかどうか」という基準に基づき、不定詞名詞化の実例を「特定解釈」と「総称解釈」に区別している。「特定解釈」は時間的・空間的な定位が可能であるのに対し、「総称解釈」は時間的・空間的に定位できない。Bücking (2010) が「特定解釈」とする名詞化の具体例として (22) の *des Erreichens* がある。一方、「総称用法」の例が (23) の *das ständige Kritisieren* である。

(22) Dem EV Landshut droht trotz **des Erreichens der Playoffs** in der Deutschen Eishockey-Liga das Aus. (Mannheimer Morgen, 10.3.1999, Bücking (2010:41) より引用)

EV ランツフートはドイツ・アイスホッケーリーグのプレーオフ進出にもかかわらず（資金問題のため）リーグからの離脱の恐れがある

(23) Mobbing-Methoden sind **das ständige Kritisieren von Arbeitsleistungen**, Drohungen, abwertende Blicke oder Gesten. (Mannheimer Morgen, 29.8.2002, Bücking (2010:42) より引用)

モラルハラスメントとされるのは、業績を絶えず批判することや、脅迫すること、侮辱的な視線やジェスチャーを向けることである

(22) と (23) を比べると、確かに (22) では、「EV ランツフートがプレーオフに進出する」という状況を1999年〇月のドイツ・アイスホッケーリーグという時間・空間に定位できる。一方、(23) については一般論を述べているので、「いつ」、「どこ」で起きた状況なのかは必ずしも問題とならないであろう。

Bücking (2010) は (20) の主張を COSMAS 2を利用して収集したコーパスデータにより裏付けている。ただし、Bücking (2010) はデータの定量的な数値について本文中で散発的に言及するのみで、一覧できる形での提示は行っていない。そこで、Bücking (2010) が実数に言及している調査語彙に関して、本文から数値を抜き出して (24) に表としてまとめ直した。

(24) Bücking (2010) のコーパスデータ

	「特定解釈」		「総称解釈」	
	項あり	項なし	項あり	項なし
<i>Zerstören</i>	12	3	53	82
<i>Vergiften</i>	5	0	ZERSTÖREN	
<i>Unterstützen</i>	8	1	12	11
<i>Vernichten</i>	19	3	UNTERSTÜTZEN	
<i>Verzehren</i>	8	1	UNTERSTÜTZEN	
<i>Überwachen</i>	5	1	UNTERSTÜTZEN	
<i>Erblicken</i>	4	0	X	0
<i>Erreichen</i>	143	0	X	0
<i>Anfertigen</i>	35	2	144	2
<i>Durchsuchen</i>	6	3	70	20

スモールキャピタルの ZERSTÖREN 及び UNTERSTÜTZEN は、実数が明示されない代わりに、*Zerstören* 及び *Unterstützen* と同じ傾向の分布を示すことが述べられていることを表している。X は、少なくとも例があったことが本文から読み取れるものの、具体的に何例あったのかは明示されていないことを意味する。コーパスに基づく例文が掲載されていても実数への言及がない名詞化については、(24) の表には含めていない。

(24) のデータからは、「特定解釈」の場合に項の表示されない例が非常に少ないことが読みとれる。一方、「総称解釈」の場合には、*Zerstören* や *Unterstützen*, *Durchsuchen* に項のない例がある。⁸ このデータは、「『特定解釈』の場合に不定詞名詞化の項が義務的で、『総称解釈』の場合には項の表示義務が弱まる」という Bücking (2010) の主張を支持する。この主張が正しいとすると、「特定解釈」と「総称解釈」の違いがどのようにして不定詞名詞化の項の義務性／非義務性に結びついているのかが問題となる。

4.2. 項の解釈と「特定解釈」・「総称解釈」の相関

「特定解釈」・「総称解釈」の違いと項の義務性・非義務性の関係について考察する上で、Bücking (2010) の「特定解釈」と「総称解釈」の判断が言語的・

⁸ Bücking (2010) 自身が述べているように、*Anfertigen* などの名詞化は「総称解釈」であっても項が義務的と考えられる。これらの名詞化の項の義務性の高さについては稿を改めて論じたい。

文法的なテストによるものではなく、「当該の状況が時間的・空間的に位置づけられるかどうか」という外界における状況の在り方に鑑みたものである点に注意が必要である。言い換えると、Bücking (2010) の「特定解釈」と「総称解釈」は文法的なカテゴリーではないということである。

「特定解釈」と「総称解釈」が文法的なカテゴリーではないとすると、この区別と不定詞名詞化の項の義務性・非義務性の相関は、直接の因果関係ではなく、何らかの意味論的背景を介したものと考えるのが妥当であろう。その意味論的背景は、一方では文脈や世界知などの外的要因とともに「特定解釈」と「総称解釈」の違いをもたらし、他方では項が表示されるかどうかということにも関わっているのである。すると、この意味論的背景が何なのかということが問題となる。

Bücking (2010) が提示している例をつぶさに観察すると、「特定解釈」・「総称解釈」の区別と項の定性の関係が見いだされる。というのも、Bücking (2010) が「特定解釈」としている例は (25) のように定の項をとっている一方、「総称解釈」の例は、項が明示されている場合、(26) のように不定の項をとっているからである。

- (25) a. Florian wollte eigentlich schon zu Hause sein. **Beim Verlassen des Büros** ist ihm aber ein Blumentopf auf den Kopf gefallen.

フロリアンは、本当はもう家に帰っていたかった。しかし、事務所を去る際、植木鉢が彼の頭に落下した

- b. Hess begründet seinen Schritt **mit seinem baldigen Erreichen des Rentenalters** in der nächsten Legislaturperiode.

ヘス氏は、彼が次の任期中にすぐ定年を迎えることをその対応の理由とした

- (26) a. Mobbing-Methoden sind **das ständige Kritisieren von Arbeitsleistungen**, Drohungen, abwertende Blicke oder Gesten.

モラルハラスメントとされるのは、業績を絶えず批判することや、脅迫すること、侮辱的な視線やジェスチャーを向けることである

- b. An zweiter Stelle der Freizeitvergehen steht **das Anfertigen von Raubkopien**.

趣味犯罪として 2 番目に多いのが海賊版の作成である

また、Bücking (2010) のコーパスデータからは、*Zerstören*, *Anfertigen*,

Durchsuchen において特に「総称解釈」の例が多いことが読み取れる。そこで、この3つの名詞化について DWDS (<https://www.dwds.de/>) の代表コーパス (Referenzkorpora) および新聞コーパス (Zeitungskorpus) の無料公開範囲から1900年以降の例を無作為に30例ずつ取り出して観察したところ、*Zerstören* では13例、*Anfertigen* では30例すべて、*Durchsuchen* では24例で項が後置属格または von 前置詞句として明示されていたが、その74.6%にあたる50例 (*Zerstören* 8例、*Anfertigen* 26例、*Durchsuchen* 16例) が、(27) のように不定の項であった。このように、Bücking (2010) のデータにおいて「総称解釈」で用いられやすいことが示されている名詞化が不定の項をとりやすいということも、項の定性が「特定解釈」と「総称解釈」の違いに関係していることを示唆している。

- (27) a. Zu Straftaten wie **dem Zerstören von Schienen** werde schon jetzt im Internet aufgerufen, sagte Claudia Schmid. (Berliner Zeitung, 23.02.2001)
 レールの破壊などの犯行はすでにインターネット上で呼びかけられている、とクラウディア・シュミット氏は言った
- b. Wissenschaftliche Arbeitsmethoden wie Literaturrecherche, Bibliographieren oder **das Anfertigen von Exzerpten** gehören zum Arbeitsalltag. (Der Tagesspiegel, 12.01.2000)
 文献調査や書誌整理、抜粋の作成といった学術研究の手法は日常作業の一部である
- c. Die Regierung bereitet auch ein Gesetz vor, das bei akuten Bedrohungen **das Durchsuchen von Fahrzeugen** im Umfeld möglicher Terror-Ziele erlaubt. (Die Zeit, 07.01.2016)
 また、政府は、緊急の場合にテロの標的となる可能性のある建物の周辺での車両の搜索を認める法律を準備している

一般に、状況に参加する個体に関する情報は、その状況を時間的・空間的に定位する手掛かりとなり得る。特に、状況の参加者が定名詞句で表されるような唯一的個体の場合、特定された個体の情報は状況の定位に大きく貢献するので、定名詞句を項にとる名詞化は比較的「特定解釈」になりやすいと考えられる。一方、参加者が不定名詞句で表されるような特定されない個体の場合、状況定位への貢献は限定的である。さらに、項が明示されず、任意の存在として解釈される

(非明示的な項の量化的解釈) 場合, 状況定位に資するような参加者の情報は与えられない。そのため, 不定の項をとる名詞化や, 項が明示されずに量化的に解釈される名詞化は「総称解釈」になりやすいと考えられる。『総称解釈』の不定詞名詞化では項の表示義務が弱まる」という Bücking (2010) の指摘は, 不定詞名詞化でも非明示的な項の量化的解釈が可能であることと, その場合に名詞化が「総称解釈」となる蓋然性が高いことをとらえたものと言える。

もっとも, (28) に示すように, 項の定性と「特定解釈」・「総称解釈」の関係はあくまで傾向にすぎない。(28a) の名詞化は *im Regelfall* 「通例」によって明示的なように「いつ」・「どこ」ということが問われない「総称解釈」だが, *dieses Formats* という定の項をとっている。一方, (28b) の名詞化は時間的・空間的に定位された「特定解釈」だが, 項は不定である。

- (28) a. Im Regelfall bietet **das Verwenden dieses Formats** für den Nutzer keinerlei Mehrwert. (Die Zeit, 01.12.2006, Nr. 49)

このフォーマットの使用は通例, 利用者にとって付加価値とならない

- b. Beim Durchsuchen einer **Luxusvilla in Marano** [...] waren die Beamten sicher, dass [...] Antonio Cardillo noch im Haus war (Die Zeit, 31.03.2012)

マラノの別邸を捜索している間, 警官たちは, アントニオ・カルデッロがまだ邸宅の中にいると確信していた

5. 名詞化の種類と指示的性質

(29) の *ung* 名詞化と (29') の不定詞名詞化の対比は不定詞名詞化の指示的な性質に関する重要な示唆をもたらす。(29a) の *ung* 名詞化は1953年5月29日に起こった現実の状況を指している。このように現実の状況を明確にそれと指す *ung* 名詞化は, (29') に示すように, 不定詞名詞化ではパラフレーズし難いのである。一方, (30) のように現実の状況を指さない *ung* 名詞化は, (30') に示すように, 問題なく不定詞名詞化でパラフレーズできる。この観察から, 筆者は, *ung* 名詞化は外界の状況を指示する表現となり得るのに対し, 不定詞名詞化は外界の状況を指示する表現としては用いられないのではないかと考える。

- (29) Im kommenden Jahr jährt sich **die Besteigung des Mount Everest durch Sir Edmund Hillary und Tenzing Norgay** zum 50sten Mal. (Der Tagesspiegel, 22.12.2002)

来年にはサー・エドモント・ヒラリーとテンジン・ノルゲイによるエベレスト山登頂から50周年を迎える

(29') ^{??}Im kommenden Jahr jährt sich **das Besteigen des Mount Everest durch Sir Edmund Hillary und Tenzing Norgay** zum 50sten Mal.

(30) Für **die Besteigung des Mount Kinabalu** gilt der März als günstigster Monat. (Der Tagesspiegel, 13.08.1999)

キナバル山に登るのにこの3月はよい月だ

(30') ^{OK}Für **das Besteigen des Mount Kinabalu** gilt der März als günstigster Monat.

ここである「指示」とは、「指示対象を外界から選び出し、表現と外界の存在を結び付ける」ことで、「外界の状況」とは、デイヴィッドソンの意味での状況、つまり状況項に対応するような外界の実体である。したがって、不定詞名詞化が外界の状況を指示しないというテーゼは、不定詞名詞化に意味論的な外延がないということではない。名詞化に対応する時間的・空間的に定位された状況が外界にあっても、名詞化はそれを指示しているわけではないということがあり得る。例えば、(31)の *Erschießen* が1947年11月26日に起こった「銃殺」という外界の状況に対応するが、この *Erschießen* はあくまで「ヤーニ・グスターフの処刑」という状況の特徴づけを行う表現であり、外界からひとつの「銃殺」を指示対象として選び出してそれと指しているわけではない。また、一見状況を指示しているようでも、実際には状況とは別種の実体を指しているという可能性もある。

(31) [Jány Gusztáv] wurde am 26. November 1947 durch **Erschießen** hingerichtet. (Die Zeit, 08.01.1993, Nr. 02)

ヤーニ・グスターフは1947年11月26日に、銃殺によって処刑された

ung 名詞化は項が明示されなくても (32) のように現実の状況を指示する表現として用いられ得る。指示対象が適切な文脈の下で同定される限り、項が明示されなくても、指示を行う上で問題とはならないのである。この時、指示された状況の参加者は文脈や世界知に鑑みて所与の個体 ((32) では文脈上の「ディスコ」) として解釈される。この個体を Disothek と置けば、(32) の名詞化は (32') のように形式化できる。項をあえて明示的に表現するならば、(33) のように、項は定の名詞句となる。(33) の名詞化の解釈は (33') である。なお、(32)/(33)

では捜索を行う動作主も「警察」とわかるので、(32')/(33') ではこの項を Polizei と置いている。

- (32) Verdacht auf Waffenhandel war der Grund einer Razzia in der Discothek [...] in der Nacht zum Sonntag. [...] Die Polizei nahm acht Personen fest. [...] **Die Durchsuchung** war richterlich angeordnet worden. (Der Tagesspiegel, 04.12.2000)

武器取引の疑いがあるそのディスコでの日曜日の未明の一斉検挙の理由だった。警察は8人を逮捕した。その捜索は令状によって命じられていた

- (32') *is*[DURCHSUCHEN (Polizei, Discothek) (s)]

- (33) (...) **Die Durchsuchung der Discothek** war richterlich angeordnet worden.

- (33') *is*[DURCHSUCHEN (Polizei, *ty*[DISCOTHEK(y)]) (s)]

(32) の *Durchsuchung* を (34) のように不定詞名詞化の *Durchsuchen* で置き換えると逸脱的な表現となる。これは上述のように、不定詞名詞化が外界の状況を指示する表現として用いられないためである。ところが、(35) のように項を明示した場合、容認度に改善が見られる。

- (34) (...) ^{??}**Das Durchsuchen** war richterlich angeordnet worden.

- (35) (...) ^{OK}**Das Durchsuchen der Discothek** war richterlich angeordnet worden.

ディスコを捜索することが裁判所によって命じられていた

(34) と (35) の容認度の違いは、ひとつに、3.2節で述べた不定詞名詞化の非明示的な項の個体的解釈の制約が関係していると考えられる。つまり、(34) の名詞化が認められるためには非明示的な項が文脈に鑑みて個体的に解釈されなくてはならないが、不定詞名詞化はそのような解釈に制約を抱えているので、(34) が容認されがたいのである。加えて、筆者は、(35) の名詞化が、(32) や (33) と異なり、命題を外延とする表現となっているのではないかと考える。すなわち、(35) の名詞化は、一見して (32) や (33) とよく似ているように見えるものの、外界から状況（日曜日の未明に実際に行われた「ディスコの捜索」）を選び出してその状況をそれと指しているのではなく、裁判所が命じたこと（命題）を「ディスコの捜索」と名付ける表現となっているのではないかとということ

である。このように考えると、ともに項が明示的に充足された不定詞名詞化の事例である (35) と (29) の容認度の差も、述語の選択制限の違いによって説明がつく。(35) の述語 *angeordnet werden* の主語は命題の表現、例えば (36) のようなモーダル要素を含む *class* 文であり得るのに対し、(29) の述語 *sich jähren* はそのような表現とそぐわないからである。⁹

- (36) Auch im Bezirksamt Wandsbek wurde angeordnet, dass ein Kind erst einmal nicht wieder bei der Mutter wohnen darf. (Die Zeit, 31.03.2014)

ヴァンズベク区役所でも、(家庭に引き渡される予定だった、現在保護している) 一人の児童について、さしあたり再び母親のところで暮らすことを認めないように指示された

また、4 節で「特定解釈」の例として取り上げた、一見すると外界の状況を指示しているようにも見える (22) (= (37)) の不定詞名詞化も、状況ではなく、事実 (真の命題) を外延とする表現と考えることができる。というのも、*trotz* は様々な補足語をとるが、典型的な補足語は (38a) のような事実を表す抽象名詞で、事実を選択すると考えられるからである。(38b) のように具体物が補足語となる場合、事実の表現として再解釈される。

- (37) Dem EV Landshut droht trotz des Erreichens der Playoffs in der Deutschen Eishockey-Liga das Aus. (= (22))

EV ランツフートはドイツ・アイスホッケーリーグのプレーオフ進出にもかかわらず (資金問題のため) リーグからの離脱の恐れがある

- (38) a. Trotz der Tatsache, dass das deutsche Rote Kreuz seit vielen Jahren über Blutknappheit klagt, hält die Regierung an ihrem Verbot fest. (Die Zeit, 31.08.2011)

ドイツ赤十字が何年も前から血液不足を訴えているという事実にもかか

⁹ *sich jähren* がモーダル要素を含む *class* 文をとる *i.* のような例もある。この場合、*sich jähren* の選択制限を満たすように、*class* 文が状況の表現として再解釈されていると考えられる。

i. Zu Jahresbeginn jährte es sich, dass Frauen in der Bundeswehr auch an den Waffen Dienst tun dürfen. (Berliner Zeitung, 26.01.2002)

年初には、女性が連邦軍で兵士として兵役を認められるようになって一年を迎えた

わらず、政府は（同性愛者の）献血禁止に固執している

- b. die beiden Männer [tanzten] trotz ihrer uneleganten Anzüge zur Melodie lunarer Gravitation (Die Zeit, 24.12.2017)

2人の男が、無骨な宇宙服（彼らが無骨な宇宙服を着ているという事実）
にもかかわらず月の重力の調べに合わせて踊っていた

この考察は、不定詞名詞化がそもそも何を表すのか（不定詞名詞化の外延はどのような実体か）という根本的な問いに結び付くものである。この点についての詳細な分析・検証は今後の研究課題としたい。

(32)–(35) は、*ung* 名詞化と不定詞名詞化の指示的な性質の違いが、項の明示されない不定詞名詞化の容認度の低さとして顕在化した例とすることができる。指示された外界の状況は時間的・空間的に定位されているので、そのような形で用いられた *ung* 名詞化は必ず「特定解釈」である。そのため、(32)–(35) のように *ung* 名詞化と不定詞名詞化の指示的な性質の違いが顕在化する場合、対比される名詞化は必然的に「特定解釈」となる。これは、「特定解釈」の不定詞名詞化において項が義務的であるとする Bücking (2010) の指摘と整合する。

6. まとめ

本稿では、ドイツ語の不定詞名詞化が義務的な項を持つとする Blume (2004) および Bücking (2010) が提示しているデータを具体的に観察・検討した。本稿の主張の要点を (39) にまとめる。

(39) a. 非明示的な項の解釈の種類：

名詞化の非明示的な項の解釈は一樣ではない。*ung* 名詞化の場合、非明示的な項を文脈や世界知から所与の個体として解釈する個体的解釈と、その項を任意の存在とする量化的解釈の少なくとも 2 通りの解釈が区別できる。不定詞名詞化の項の義務性に関する Blume (2004) の観察は、不定詞名詞化が非明示的な項の個体的解釈に制約を抱えていることを示唆している。非明示的な項の量化的解釈は、不定詞名詞化でも可能である。

b. 項の解釈と名詞化の「特定解釈」・「総称解釈」の関係：

状況の参与者に関する情報はその状況を時間的・空間的に定位する手がかりとなる。そのため、項の解釈の種類は名詞化の「特定解釈」・「総称解釈」とも関連する。

c. 名詞化の種類による指示的特徴の違い：

ung 名詞化が外界の状況を指示するのに用いられるのに対し、不定詞名詞化はそのような表現には用いられない。この違いは、両名詞化の意味論的外延の違いに起因している可能性が高い。

不定詞名詞化の項の義務性に関するデータを適切にとらえるには、非明示的な項の解釈が様々であることを考慮に入れ、各々の解釈がどのような意味論的背景を通じて導かれるのか、あるいは導かれないのかを明らかにすることが重要と言える。

参考文献

- Bierwisch, Manfred. (1989): Event nominalization: Proposals and problems. In: Motsch, Wolfgang. (ed.), *Wortstruktur und Satzstruktur*. Berlin: Akademie der Wissenschaften der DDR; Zentralinstitut für Sprachwissenschaft. 1–73.
- Blume, Kerstin. (2004) : *Nominalisierte Infinitive: Eine empirisch basierte Studie zum Deutschen*. Tübingen: Niemeyer.
- Bücking, Sebastian. (2010): Zur Interpretation adnominaler Genitive bei nominalisierten Infinitiven im Deutschen. In: *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 29. 39–77.
- Bücking, Sebastian. (2012): *Kompositional flexibel Partizipanten und Modifikatoren in der Nominaldomäne*. Tübingen: Stauffenburg.
- Davidson, Donald. (1967): The Logical Form of Action Sentences. In: Rescher, Nicholas (ed.), *The Logic of Decision and Action*. Pittsburgh: University of Pittsburgh. 81–95.
- Ehrich, Veronika. (1991): Nominalisierungen. In: Stechow, Arnim von & Wunderlich, Dieter (eds.), *Semantik* (HSK 9). Berlin; New York: De Gruyter. 441–458.
- Ehrich, Veronika & Rapp, Irene. (2000): Sortale Bedeutung und Argumentstruktur: *ung*-Nominalisierungen im Deutschen. In: *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 19 (2). 245–303.
- Hartmann, Katharina & Zimmermann, Malte. (2003): Syntactic and Semantic Adnominal Genitive. In: Maienbaum, Claudia (ed.), *(A) Symmetrien*. Tübingen: Stauffenburg. 172–202.

- Kobayashi, Taishi. (2017): Zur fehlenden Objekt-Lesart von Genitivkomplementen bei Nominalisierungen im Deutschen – mit besonderer Berücksichtigung der primären und sekundären Kasuszuweisung. In: Tanaka, Shin et al. (eds.), *Grammatische Funktionen aus Sicht der japanischen und deutschen Germanistik* (Linguistische Berichte Sonderheft 24). Hamburg: Buske. 271–289.
- Schumacher, Helmut et al. (2004): *VALBU – Valenzwörterbuch deutscher Verben*. Tübingen: Narr.
- Steinitz, Renate. (1992): „Modern“: Argumentstruktur, „Traditionell“: Valenz – Versuch eines Brückenschlags. In: *Linguistische Berichte* 137. 33–44.
- Tesnière, Lucien. (1959): *Éléments de Syntaxe Structurale*. Paris: Klincksieck. 小泉保 監訳. 2007.『構造統語論要説』. 研究社.
- Ullmer-Ehrich, Veronika. (1977): *Zur Syntax und Semantik von Substantivierungen im Deutschen*. Kronberg: Scriptor.
- Williams, Edwin. (1981): Argument Structure and Morphology. In: *The Linguistic Review* 1 (1). 81–114.
- 小林大志. (2020): ドイツ語の名詞化における項実現の統語論的・意味論的原理 名詞項と指示同定の関係に注目して. 東京外国語大学. 博士論文.

書評：新本史斉著『微笑む言葉、舞い落ちる散文 —ローベルト・ヴァルザー論』鳥影社，2020年

Rezension zu: Fuminari Niimoto: *Lächelnde Worte, nach unten tänzelnde Prosastücke*. Nagano: Choeisha, 2020.

木村 千恵

東京外国語大学大学院博士後期課程

Chie KIMURA

Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

「ヴァルザーの書いたものはたくさん読むことができるが、彼については何も読むことができない」¹ と同時代人のヴァルター・ベンヤミンが評しているように、スイスの作家ローベルト・ヴァルザー（1878-1956）は、その人物像も作品もどこか謎めいている。ヴァルザーが遺した作品は膨大な数に昇るが、彼の作品ではいつも、これといった事件や出来事が起こらないまま、登場人物や語り手による絶え間ないおしゃべりが繰り返される。その文体は、つかみどころのなさと同時に、牧歌的な軽やかさを感じさせる。その無内容さと幸福感の両方をあわせもつ奇妙な印象は、フランツ・カフカにも好まれていた²。生前は大きな名声を手にもすることもなく、彼の死後も長らく忘れられた作家であったが、1970年代以降は再評価が進んでおり、今日では多くの作家や芸術家に高く評価されるとともに、ドイツ語圏のみならず国際的に学術研究が進められている。日本では、本書の著者である新本史斉氏が中心となって刊行した『ローベルト・ヴァルザー作品選集』（鳥影社）によって、本格的に紹介されてきた。ここでとりあげる『微笑む言葉、舞い落ちる散文—ローベルト・ヴァルザー論』は、そのようなヴァルザーについての日本で初めてとなるモノグラフィーである。

本書のタイトルとなっている「微笑む言葉」、「舞い落ちる散文」は、それぞれヴァルザー自身の作中の文章をもとにしたフレーズであり、どちらも彼の「幸福な言葉」が生まれることになった経緯を象徴的に表現している。本書は、すでに

¹ Benjamin, Walter: Robert Walser [1929]. In: Walter Benjamin: *Gesammelte Schriften*. Bd. II,1. Hg. v. Rolf Tiedemann u. Hermann Schweppenhäuser. Frankfurt a. M. 1991, S. 324. 「ローベルト・ヴァルザー」 浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション2』（ちくま学芸文庫，1996年，98頁）

² Brod, Max: Kafka liest Walser. In: Katharina Kerr (Hg.): *Über Robert Walser*. Bd. 1. Frankfurt am Main: Suhrkamp 1978/1979, S.85–86.

刊行された『作品選集』の構成を辿ってゆくテーマ的な解釈（第1部）、ならびに、著者自身の翻訳実践を手がかりとしたレトリック分析（第2部）という2つのアプローチによって、ヴァルザーの奇妙な言語活動の成立過程とそのアクチュアリティを明らかにしていく。本書の冒頭では、ヴァルザーの言語に対する懐疑的な意識が、すでに初期の散文に表れていることが指摘されている。19世紀末から20世紀初頭にかけて、言語が現実を表現できるかという問いは哲学者や作家たちにとって根本的なテーマの一つとなっており、ヴァルザーの創作活動もこうした問題との闘いの軌跡であった。

第1部では、詩や散文、小戯曲を書いた初期スイス時代（1899-1905）、3作の長編小説を続けて出版したベルリン時代（1905-1913）、故郷の小都市で散文小品の執筆に専念したビール時代（1913-1921）、ミクログラムと呼ばれる独自の微細な文字を使用して数多くの作品を生み出したベルン時代（1921-1933）という、ヴァルザーのそれぞれの創作時期における代表作が論じられる。第1章では、ヴァルザーの作品全体に通底する、言語や虚構に対する反省的な態度が顕著に現れている例として、初期の小戯曲『白雪姫』が取り上げられる。そのなかで、現実を「真実と嘘」、「善と悪」というように、二元論的に切り分けようとする近代社会の制度に対する、ヴァルザーの批判的な意識が浮き彫りになる。第2章ではまず、小戯曲『少年たち』ならびに『詩人たち』を通して、初期のヴァルザーが直面していた言語危機の問題と、ナイーブで陰鬱な詩人や芸術家のクリシェに対する彼の抵抗が説明される。その後、『白雪姫』やベルリン時代の長編小説『タンナー兄弟姉妹』において、軽やかで幸せな言葉が誕生する過程が説明される。第3章では、ベルリン滞在を通して確立されていくヴァルザーの作家としてのアイデンティティがテーマとなる。大都市と若き作家の差異にはじまり、成功した画家の兄カールと弟ローベルトとの差異、ドイツの伝統的な教養小説に対する、成長を拒む主人公を描いた日記体小説『ヤーコプ・フォン・グンテン』との差異等を示しながら、彼が「小さなもの」や「日常的なもの」を好んで取りあげるようになる経緯が解き明かされる。しかし、ヴァルザーの文学形式や彼のお気に入りのモチーフは、同時代の読者からの理解を得られるものではなかった。第4章では、彼がいかにしてベルリンでのスランプを克服し、故郷の小都市ビールで再び書くことに喜びを見出したかが説明されている。ここでは、中編小説『散歩』を手がかりに、事の大小を問わず無秩序に訪れる事物に身を任せるとともに、書くという行為そのものを意識するという、ヴァルザーの創作論が提示される。こうした思考法は、第5章で論じられる長編小説『盗賊』へと発展してゆく。この時期のヴァルザーは、鉛筆で小さな文字を書き連ねることを通して、綿密な作業の

要求する忍耐とともに、子どものような幸福感を再び経験することになる。こうした書記行為こそが、長編小説という形式のパロディ化や表象行為が内包する暴力性への自覚といった、内省的な洞察をこの小説にもたらしめているのである。以上のように第1部は、各章で展開される個々の作品の詳細な分析を通して、ヴァルザーの思想の多面性を探っていくとともに、全体としては、「成長を拒む」主人公を書き続けたヴァルザーの作家人生の変遷を描き出すものになっている。

第2部では、本書でもっとも重要な位置を占める小戯曲『白雪姫』の全訳が収められるとともに、英語、フランス語、日本語の翻訳との比較を通して、「Bild（画像，光景，心的イメージ）」「Sinn（意味と感覚）」「Märchen（メルヒェンと作り話）」といった多義的な言葉の意味が検討される。英語やフランス語とは異なり、日本語にはドイツ語と意味範囲が相当する単語が存在しないからこそ、翻訳困難な言葉や、一元的なイメージから巧みにすり抜けるレトリックを検証することが可能となっている。そして、このように著者自身がヴァルザーのテキストを日本語に写し取ろうとする姿勢は、モデルを見つめ、描き出そうとするヴァルザーの言語活動を実践的に再現したものとなっている。

一般にヴァルザーというと、精神病院で余生を過ごしたという伝記的事実から、繊細で不幸な作家というイメージがつきまとう。しかし、こうしたイメージは、カフカによる「彼から生まれ出るものといえ、読者の幸福にほかならない」³や、ベンヤミンによる「彼ら〔ヴァルザーの主人公たち〕はみな癒された人々なのである」⁴といった評価とは大きく異なっている。すでに近年の研究では、ヴァルザーの複雑な文体や微細な文字と精神疾患の兆候として読み取ったり、浮世離れした孤独な詩人として神秘化したりするような解釈は疑問視されている。しかし他方で、ヴァルザーの作品が提供する幸福な読後感を論証するのは困難であった。本書は、実はこうしたクリシェこそ、ヴァルザーが生涯を通して抵抗してきた近代的な価値制度のひとつであると見抜き、彼が膨大な数の作品を書き続けた理由を解き明かしている。さらに、ヴァルザーの戦略的な言葉の読解を通して、読者自身の価値観さえも揺るがされるのである。こうしたテーマを論じることができたのは、著者が長年翻訳と文学研究の両方の立場から、ヴァルザーの表層的でありつつ深遠な言葉に向き合ってきたことによるものである。本書は、そのような近代の制度から解放されたヴァルザーの「微笑む言葉」や、雪ひらのように「舞い落ち」、残り続けている散文を読み解くための視座を与えてくれる。

³ 本書96頁。Kafka, Franz: Brief an Direktor Eisner. In: Kerr 1, S. 76.

⁴ 同上。Benjamin, S. 326.

研究会便り

■ 合評会・総会

『DER KEIM Nr. 42』の合評会および2019年度総会は、2019年5月23日（木）19時より東京外国語大学語学研究所にて開催されました。

2020年度総会は、2020年8月21日（金）16時よりZoomオンラインミーティングにて開催されました。

■ サマースクール

2019年度のドイツ語サマースクールは講師の不足により、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響で開催を見合わせました。

■ 博士論文

小林大志：「ドイツ語の名詞化における項実現の統語論的・意味論的原理—名詞項と指示同定の関係に注目して—」（2020年9月15日）

■ 研究発表

木村千恵：「ローベルト・ヴァルザーの絵画テキストに見られる時間の多層性について」（スイス文学研究会、2019年12月14日、東洋大学）

小林 大志：Kausalität auf Zustand? Eine koordinative Analyse zu deutschen „Wirkungsverben“（Linguisten-Seminar 2020 Online、2020年9月2日、オンライン）

東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会会則

2004年5月13日制定

2008年5月26日改定

2015年5月21日改定

第一条（名称）

本会の名称は「東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会」とする。

第二条（目的）

本会はドイツ語学・ドイツ文学・ドイツ文化に関する広範な研究を行うことを目的とする。

第三条（活動範囲）

本会は次の活動を行う。

- (1) 研究会活動
- (2) 研究会誌『DER KEIM』の発行
- (3) 「ドイツ語サマースクール」の企画・運営・開催
- (4) その他

第四条（会員）

- 1 本会は通常会員と賛助会員から成る。
- 2 通常会員は第三条に挙げた活動を行う。
- 3 賛助会員は本会の趣旨に賛同し本会の活動を賛助する。

第五条（通常会員）

- 1 次のいずれかに該当する者は通常会員の資格を持つ。
 - (1) 東京外国語大学大学院でドイツ語学・ドイツ文学・ドイツ文化を研究する学生
 - (2) 東京外国語大学大学院でドイツ語学・ドイツ文学・ドイツ文化を研究した卒業生で入会を希望するもの
 - (3) 東京外国語大学非常勤講師で入会を希望するもの
- 2 通常会員は年3,000円の年会費を支払う。

第六条（賛助会員）

- 1 次のいずれかに該当する者は賛助会員の資格を持つ。
 - (1) 東京外国語大学大学院でドイツ語学・ドイツ文学・ドイツ文化を研究する専任教員
 - (2) 東京外国語大学大学院でドイツ語学・ドイツ文学・ドイツ文化を研究した卒業生で本会の活動への賛助の意思のあるもの
 - (3) その他本会の趣旨に賛同し活動への賛助の意思のあるもの
- 2 賛助会員は年一口 1,000 円の賛助金を一口以上納め、本会の活動を賛助する。

第七条（会費および賛助金の使途）

会費および賛助金は次の目的に使用する。

- (1) 本会の運営
- (2) 本会の研究会誌『DER KEIM』発行
- (3) その他

第八条（運営委員とその任務）

- 1 本会に次の運営委員を設ける。
 - (1) 運営委員長（総会の招集、運営活動の統括）
 - (2) 編集担当（研究会誌『DER KEIM』の編集）
 - (3) 会計担当（会計）
 - (4) 企画担当（研究会活動・サマースクールの企画及び運営）
- 2 運営委員は総会で通常会員及び賛助会員から選任する。
- 3 運営委員の任期は一年とする。ただし再任はさまたげない。

第九条（総会）

- 1 総会はこれを本会の最高意思決定機関とする。
- 2 本会の総会は通常総会と臨時総会に区別する。
- 3 通常総会は毎年一回運営委員長が招集する。
- 4 臨時総会は必要に応じて運営委員長が招集する。

第十条（総会の議事）

- 1 総会の議長は原則として運営委員長がつとめる。
- 2 総会の議事は、出席した会員の過半数をもって議決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十一条（総会の議決事項）

総会では以下の事項を審議し，議決する。

- （1） 本会の運営委員の選任
- （2） 収支決算・予算の承認
- （3） 本会の活動の報告，活動計画の決定および変更
- （4） その他

第十二条（経費）

本会の経費は会費，賛助金及びその他の収入によってまかなう。

第十三条（会計年度）

本会の会計年度は毎年4月1日に始まり3月31日に終わる。

第十四条（会計監査委員と会計報告）

- 1 本会に運営委員とは別に会計監査委員を設ける。
- 2 会計監査委員は総会で通常会員及び賛助会員から選任する。
- 3 運営委員は毎年度決算報告書を作成し，会計監査委員による会計監査を受けた上で通常総会で報告する。

第十五条（細則）

運営委員はこの会則を施行するため，またはこの会則に定めない事項について必要があるときは，総会の承認を経て細則を定めることができる。

第十六条（本会会則の改廃）

本会則の改定または廃止は総会における出席者の3分の2の賛成によって議決され発効する。

『DER KEIM』バックナンバー一覧

Nr. 1 (1977)

- 大島衣:「ダントンの死」におけるロベスピエール像
 江原吉博:抒情詩人マイアーの魂の遍歴—水と星のモチーフをめぐる—
 吉原高志:ドイツの伝承童謡について
 Koichi Sunaga: Betrachtungen zum Possessivpronomen in der deutschen Sprache der Gegenwart
 Kazuhiro Ochi: Notizen zur Literatursoziologie

Nr. 2 (1978)

- 沢岡藩:魔的なものの系譜—トーマス・マンの心性—
 Hirofumi Mikame: Notizen zur Valenztheorie
 Katsufumi Narita: Koartikulatorische Eigenschaften der VIV- und VnV- Lautfolge im Deutschen

Nr. 3 (1979)

- 江原吉博:裁く者と裁かれる者の逆転劇—C. F. マイアーの「女裁判官」—
 恒川元行:「相対化」する精神—ビューヒナーのことばと時代—
 Fumiya Hirataka: Schillers Lied „An die Freude“

Nr. 4 (1980)

- 岡田公夫: Aktionsart と動詞の分類
 湯浅英男:現存完了形におけるモドゥスの側面について—トーマス・マンの『魔の山』の例文を用いて—
 井口靖:ドイツ語法副詞の「主観性」と「客観性」
 飯沼隆一:『ファウストゥ博士』試論—語り手の視点—
 山路朝彦:ヘルダーリンにおける „die heilige Nüchternheit“ (「聖なる覚醒」) という概念について

Nr. 5 (1981)

- 木崎章光:ヴェルンヘルの語りに於ける表現の魅りについて
 沢岡藩:感覚化した言語—ハントケの「短い手紙」—
 Nobuo Ikeuchi: Bedeutungsanalyse und semantische Valenz —Eine Studie zur semantischen Valenz als Verträglichkeits- bedingung—
 井口靖:「モダリティ」の定義に関する一考察
 森信嘉:〈意図性〉を表わす言語表現に関して
 堀口里志:形容詞派生の他動詞の結果性について
 Takashi Narita: Zu den Präpositionen, die den Dativ und Akkusativ regieren

Nr. 6 (1982)

- 堀口里志:述語的形容詞の用法—den Kaffee schwarz trinken のタイプ—
 成田節:「場所の変化」から「状態の変化」へ—den Wagen mit etwas beladen 型の表現についての考察—
 畔上泰治:連続性の回復を求めて—クライストの「拾い子」をめぐる—
 長澤崇雄:不機嫌な青春—ハインリッヒ・ハイネの『ハールツ紀行』をめぐる—
 吉原高志:モモを読む—仲介者としてのモモをめぐる—

Nr. 7 (1983)

- Asahiko Yamaji: Zu Hölderlins Bestimmung des Tragischen
 Hiroshi Takeuchi: Georg Büchner: „Woyzeck“ —dramatischer Aufbau und Sprache—
 長澤崇雄:「空間」への冒険—ハインリッヒ・ハイネ『フランスの情況』試論—
 畔上泰治:関係としての世界—クライスト「O... 侯爵夫人」研究—
 城岡啓二:意志動詞と無意志動詞の対立

Nr. 8 (1984)

- 井口英子:非人称受動の用法
 栗山郁雄:beginnen と結びつく動詞
 小川曉夫:起点・到達点表現の非対称性—〈物の移動〉表現における意味構造に関して—
 城岡啓二:lassen と「せる・させる」
 田畑義之:動詞語義の拡大パターンについて
 畔上泰治:物語の意味作用について
 飯沼隆一:ホーフマンスタール論初期・I
 岩川直子:R. プルトマンの「非神話化」論
 長澤崇雄:掠め取られた「成熟—アルトゥール・シュニッツラーの『ある別れ』について
 竹内宏:全作品を貫く螺旋—ハンス・E・ノサック論—

Nr. 9 (1985)

- 野村法:伝説と昔話
 吉原高志:ユーミールと探偵たち—都市を読みかえる子供達—
 刀禰泰史:注目の喚起—グリム昔話集における Sage 的 Erzähltyp を中心に—
 竹内 宏:G・ビューヒナー:『レンツ』試論—自然描写を中心として—
 長澤崇雄:暁には未だ遠い時間—ドイツの犯罪小説をめぐる (1)—

畔上泰治：時代と否定—ゲオルク・ハイム論—
 田畑義之：統語的派生による状態変化表現
 太田タカユキ：国語の森の外へ—言語の創造性と翻訳—
 小川曉夫：他動的移動を表わす動詞の前綴化—起点・到達点・両点表現の対照—
 永岡敦：分離前綴 mit- について
 栗山郁雄：文レベルにおける beginnen との共起性に関する一考察

Nr. 10 (1986)

藤縄真由美：「物・事」を主語とする再帰表現についての意味論的一考察
 洞沢伸：「使役」の構造型—geben 型と bringen 型—
 栗山郁雄：動詞の意味タイプと beginnen
 大矢俊明：Modalwort についての一考察
 田畑義之：統語的・意味的環境に条件づけられた語義変容パターンについて
 飯沼隆一：象徴の消点—ホーフマンスタールの『騎兵物語』—
 野村法：昔話と心理学

Nr. 11 (1987)

塩川京子：「追憶」と「予感」—ノヴァーリスの「ハインリッヒ・フォン・オフターディンゲン」の「青い花」の構造—
 小西宏明：抒情詩人・若きゲーテの発展
 太田タカユキ：等価の研究
 押野洋：ケラーの『幸運の鍛冶屋』試論—事物描写を中心に—
 志賀邦瑞：昔話（Märchen）と伝説（Sage）の心理学
 藤縄真由美：現代ドイツ語における再帰代名詞の機能的分類

Nr. 12 (1988)

伊藤公三：古高ドイツ語の他動詞文における zu 不定詞と原形不定詞—Erian の用例に基づいて—
 栗山郁雄：移動動詞における「動作性」と「移動性」—beginnen との共起性を手掛かりにして—
 志賀邦瑞：昔話（Märchen）と心の領域
 押野洋：太ったシュトラピンスキー—ケラーの「馬子にも衣裳」—
 小西宏明：ゲーテの初期抒情詩における叙景と韻律

Nr. 13-14 (1990)

宮澤義臣：付加語的属格と動詞派生名詞に関する一考察
 田中一嘉：ドイツ語の意志・願望表現について—Aufforderung における wollen と möchte を巡って—

鈴木直樹：コブラ性
 一條亮子：酔う観客から問う観客へ—『例外と原則』をめぐる—
 津山拓也：ペレグリーヌスの幸福—『蚤の親方』試論—
 小西宏明：初期抒情詩の自然描写におけるゲーテの視点
 中山由美：南西ドイツの方言学（研究ノート）

Nr. 15 (1991)

藤縄康弘：同一構文に現れる動詞の意味分配—el/e3/e4 構文を対象に—
 磯村一弘：日本語の五母音が日本人のドイツ語の発音に与える影響—その音響的観察—
 宮澤義臣：Kromayer: Deutsche Grammatica における文法観
 今村理子：グリム昔話集の文体
 本田雅也：物語世界の成り立ち—E.T.A. ホフマンの『砂男』と『黄金の壺』の重なりとずれ—
 小西宏明：「水上の霊の歌」におけるゲーテ的視覚

Nr. 16 (1992)

平野篤司：山口幸輔先生追悼
 林良子：日本人ドイツ語学習者のドイツ語発音の特徴—文中の単語の持続時間とポーズの観察—
 神谷善弘：ドイツ語教育の問題性—非常勤講師の立場から—
 藤縄康弘：Daß 文と zu 不定詞句の用法と述語動詞の意味範疇
 今村理子：グリム昔話とアンデルセン童話との比較
 本田雅也：アヴァンギャルド・ホフマン—ロシアにおける E.T.A. ホフマン受容
 小西宏明：「旅人の夜の歌（第一）」に寄せて

Nr. 17 (1993)

新井瑞穂：劇場としてのオーストリア—『ヘルデンブラッツ』をめぐる—
 一條亮子：プレヒト『処置』の行き先を
 小西宏明：行為としての詩作—「旅人の夜の歌（第二）」に寄せて—
 大藺正彦：「動詞行為に伴う属性」表現についての意味論的考察
 神谷善弘：2 年次に何を教えるか—専修大学文学部における実践例—（研究ノート）

Nr. 18 (1994)

今村理子：アメリカのフェミニズム批評からのグリム童話研究
 西口祐子：グリム兄弟と昔話の「信憑性」—民

俗学における語り手に対する態度の変遷から
みて—

林 良子：ドイツ語におけるフォーカスの音響音
声学的考察

黒田 廉：前綴り ab- の機能に関する考察

Nr. 19 (1995)

黒田 廉：前綴の意味機能について

徳岡知和子：現実には生きるノヴァーリス—ある
べき人間の姿を求めて—

山崎由貴：ヴォルフガング・ボルヒェルト作
『戸口の外で』について

Masahiko Ozono: Reine Kasus und präposi tionale
Kasus—Eine Überlegung zu deren Kodierungsbe-
dingungen—

Nr. 20 (1996)

中川亜貴子：『世界審判』に見るカール・クラ
ウスの第一次世界大戦に対する批判的なまなざ
し

林良子：ドイツ人は日本語のアクセント 語を
どのように聴くか

三宅洋子：「視点」と文型の選択—ドイツ語動
詞 drücken を例に—

時田伊津子：「物」の 3 格を伴う他動詞文の意
味構造

亀ヶ谷昌秀：移動動詞 steigen についての一考
察—マンハイム・コーパスによるコロケー
ション分析—

大藺正彦：bekommen 受動をめぐる諸問題

工藤 愛：関係文と冠詞の関係についての一考察
黒田 廉：移動と分離・非分離前綴（研究ノート）

Nr. 21 (1997)

Ryoko Hayashi: Differenzierung der japani schen
und deutschen Vokale durch Formantstrukturen
in männlichen und weiblichen Stimmen

西口拓子：グリム『昔話集』における方言による
語り

三宅洋子：「物」を主語とし、経験主を対格目
的語として表す他動詞文の意味的考察

Nr. 22 (1998)

本田雅也：石の心臓とカウボーイーファンタ
ジー—児童文学とベンノー・ブルードラ『海賊
の心臓』—

杉岡幸徳：ゲオルク・トラークル、詩人と麻薬

黒田 廉：空間関係を表現する分離・非分離前つ
づりおよび前置詞による移動表現について

時田伊津子：物の 3 格を伴う他動詞文の意味的
分類

妹尾知昭：道具名詞派生動詞に関する考察

林 良子：ドイツ語の Fortis/Lenis 閉鎖音の知覚
における母音及び閉鎖区間の持続時間と基本
周波数の意味

Nr. 23 (1999)

阿部一哉：凝縮と 4 格化

山田寛明：ドイツ語の代名詞 es の用法記述につ
いて

横浜正明：ロリオ研究 2—ロリオのユーモア—
萩原耕平：リルケ『始源音』についての小論

妹尾知昭：ラテン語基本動詞の形態的比率—ド
イツ語基本動詞 1300 との比較—（研究ノー
ト）

Nr. 24 (2000)

萩原耕平：滅びのなかの永遠—リルケ『オル
フォイスへのソネット』—

Yuri Komatsubara: Das Bild der Menschen in der
Weimarer Republik

時田伊津子：二重目的語構文の実証的分析

阿部一哉：現代ドイツ語における er- 動詞—辞
書の語義記述に基づく意味分類—（研究ノー
ト）

山田寛明：ドイツ語 Acl 構造のコーパス分析と
その問題提起（研究ノート）

Nr. 25 (記念号) (2001)

在間進：そうならないように、みんなで頑張り
ましょう。

菊池武弘：KEIM25 号にさいして—先輩のお祝
いとお説教と期待のことば

カン・ミンギョン：ドイツ語「状態変化動詞」
の統語の意味約分析

西口祐子：グリムの同時代人、ベヒシュタイ
ン—その昔話とアイロニー—

小松原由理：新しい言葉を求めて—ラウル・
ハウスマンの言語実験—

Yuki Akino: Das Urheberrechtsproblem bei Choreo-
graphien in Japan: computergestützte Laba-
notation als Lösung

西村尚志：虚構と現実—映画の分析を通して

Nr. 26 (2002)

久保美由紀：シュテファン・ツヴァイクとヨー
ゼフ・ロートのコスモポリタン性—「オース
トリア」と「ハプスブルク」と「ユダヤ」—

阿部一哉：語幹に形容詞を持つ er- 動詞

Minkyong Kang: Einige Probleme der kausativ-
inchoativen Alternationen bei den Zustands-
veränderungsverben der deutschen Sprache

Marco Raindl: „Ein Garten/So weise ange legt“: Geschich-
te im Bild von gestalteter Natur in Brechts

„Buckower Elegien“

斉藤理恵: ent- 動詞についての考察 (研究ノート)

Nr. 27 (2003)

小松原由理: グロテスクな自己演出—ジョージ・グロスの風刺世界とタダ的身振り—

吉田耕太郎: 首都と地方都市の誕生—地図と旅行記から確認する 18 世紀ドイツ空間表象について—

カン・ミンギョン: 言語運用にみるドイツ語「状態変化動詞」の自他 (研究ノート)

Nr. 28 (2004)

吉田耕太郎: 文学的営為と道徳—C・F・ゲラーの演劇論・文学論の分析から—

原真理: カフカとイデッシュ

寺田葉子: 記憶の場所/建築—ベルリン・ユダヤ博物館をめぐって—

浜津大輔: ドイツ語における 3 格の用法の実態調査—吉本ばなな『アムリタ』のドイツ語訳 (“Amrita”) を題材として (研究ノート)—

Nr. 29 (2005)

加藤由実子: ドイツ語を母語とする日本語学習者の文章における「視点」の傾向—授受動詞・移動動詞について—

阿部一哉: 言語運用に基づくドイツ語研究の試み

田原奈穂子: 現実と表象の間の劇場空間—ベルリン・フォルクスビューネにおける『白痴』(ドストエフスキー作, フランク・カストルフ脚色・演出) の上演とその舞台としての『ノイ・シュタット』(ペルト・ノイマン設計)—

吉田耕太郎: 啓蒙の文学論—エンゲル『ハンドルク論』(1774) の射程とその文学的コンテクスト—

Nr. 30 (2006)

杉山香織: ケストナーの児童文学観—民衆本『オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』の語り直し—

大塚ちはや: ログ入り T シャツの挑発—クリスティアン・クラハト『ファザーラント』にみるドイツのポップ文学—

吉田耕太郎: 文化の地勢を旅行する—『クアラント女性の手紙』におこまれた文化的差異とジェンダー—

板橋祐己: 歴史的絶対者の可能性—ユルゲン・ハーバマスの『絶対者と歴史』における『世界時代』構想の射程—

須田佳寿子: ドイツ語動作受動文のコーパスに

基づく使用頻度分析 (研究ノート)

Nr. 31 (2007)

モハンマド・ファトヒー: 名詞付加語の zu 不定詞句について

山本裕子: 言語・語り手・生—エルフリーデ・イエリネクが語るもの—

Vincenzo Spagnolo: Ad-hoc-Wortbildung—am Beispiel der Zeitkolumnen von Tita von Hardenberg—

Nr. 32 (2008)

大塚ちはや: 「私」が語る文学—ドイツ「ポップ文学」の語りのあり方—

小畑友佳: クリエムヒルトとブリュンヒルト—なぜ『ニーベルンゲンの歌』のヒロインはクリエムヒルトなのか—

仲間絢: バンベルク大聖堂の聖母像とその表現様式の発展

高橋美穂: ドイツ語移動動詞における完了の助動詞の選択—bummeln, fliegen, rudern, schwimmen, segeln を対象としたコーパスに基づく頻度分析

信國萌: ドイツ語形容詞における副詞の用法の分類

モハンマド・ファトヒー: 名詞を修飾する分詞について

Nr. 33 (2009)

平野篤司: 晩年スタイル—アドルフをめぐって—

山口裕之: ベンヤミンはハイパーテキストの夢を見るか. あるいは, ハイパーテキストの触覚性

西口拓子: ロッテ・ライニガーの影絵アニメーションとメルヘンの世界

吉田耕太郎: 踊る身体—身体と動作のひとつの概念史として

秋野有紀: 「万人に文化を」とミュージアム政策. フランクフルト・アム・マイン市における 1970 年代初頭の政策を例に

杉山香織: ケストナー『エーミールと探偵たち』の昭和初期日本における受容

山本裕子: 『ウルリーケ・マリア・シュトゥアルト』の二つの上演. 「ドイツ赤軍派」をめぐる記憶と表象

Mohamed Fathy: Zur Konkurrenz von zu-Infinitivkonstruktionen und dass-Sätzen (研究ノート)

大塚ちはや: ドイツの 90 年代ポップ文学は終わったか? (研究ノート)

Nr. 34 (2010)

秋野有紀: 文化政策的な視点からのクルトゥー

ア・フェアミットルンクへの一考察—ドイツは芸術文化政策の公共性をいかに理論化しているのか

桑山佳子：翻訳文学における女ことば 翻訳規範の視点からの考察

杉山香織：ケストナー『エーミールと探偵たち』の現代日本における翻訳

Nr. 35 (2011)

在間進：ドイツ語研究に関する三つの考察—内容認性、規則化、使用頻度—

田中雅敏：定動詞後置を伴わないドイツ語の副文にみる定動詞位置の動機づけ

田嶋諒一：スイスにおける多言語の状況。4つの国語とドイツ語ダイグロシア（研究ノート）

油尾昌輝：チェコ語・ドイツ語の語法の助動詞の比較（研究ノート）

Nr. 36 (2012)

秋野有紀：創造過程への支援という視点から見た劇場政策の課題。ドイツにおける劇場の統廃合と超域的な支援手法の登場は何を意味するのか

小林大志：「条件文的」に解釈される名詞句の冠詞選択について

桑山佳子：多和田葉子のテキストにおける文字。『ボルドーの義兄』『飛魂』を中心に（研究ノート）

高橋美穂：移動動詞の使役化について（研究ノート）

Nr. 37 (2013)

村瀬民子：ハイナー・ミュラーの創作における翻訳の可能性—シェイクスピア『お気に召すまま』翻訳をめぐる—

阿部一哉：動詞＋名詞コロケーション分析に基づく句例抽出手法

小林大志：語幹派生名詞と項の実現—動詞対格項を属格で実現できない派生名詞について—（研究ノート）

Nr. 38 (2014)

在間進：ドイツ語研究の新たな構想—個別言語研究の実用的応用—

佐藤宙洋：interessieren – interessiert – Interesseの語法—前置詞の意味を手がかりに—

井坂ゆかり：形容詞述語の意味構造と相関詞esの出現の義務性・任意性—事実性の観点から—

木村千恵：消去のシステムとしての饒舌性—ローベルト・ヴァルザーの『散歩』に

ついて—

成田吉重：ドイツ語心態詞について—情報の共有の視点から—

Nr. 39 (2015)

田辺とおる：フランツ・シュレーカーのオペラ《烙印を押された人々》における欲望のかたち

永盛鷹司：物語の共有—ラフィク・シャミの『夜の語り部』について—

Nr. 40 (2016)

高橋美穂：移動を表す不変化詞動詞と経路項との共起について—fahrenの不変化詞動詞を対象に—

田辺とおる：フランツ・シュレーカーのオペラ《烙印を押された者たち》にみるシェンベルクの余韻—《幸福な手》との関係において—

木村千恵：創作活動／盗賊稼業—ローベルト・ヴァルザー「盗賊」における断片からの創造—
永盛鷹司：伝達の形式としての「真実」と「物語」—ラフィク・シャミ『夜の語り部』の「語り」—

Nr. 41 (2017)

佐藤宙洋：接頭辞be-の類推促進機能：bemerkenを例に

田辺とおる：オペラを書く、というオペラー—シュレーカーの自伝的出世作《遥かなる響き》—

Nr. 42 (2018)

高橋美穂：移動を表す不変化詞動詞における起点・着点の表出—ausfahren, einfahrenを例に—
小林大志：ドイツ語における名詞化複合語の項の解釈について—一項の意味論的階層関係と階層外項—

佐藤宙洋：同幹類義動詞の研究：merk-とその派生語の場合

永盛鷹司：哲学の挫折の物語：フィリップ・マインレンダーの『ルベルティエーネ・デル・フィーノ』の新たな位置づけ（研究ノート）

※バックナンバーをご希望の場合は、当研究会までご一報下さい。

DER KEIM Nr. 43-44 執筆者

佐藤宙洋／さとうたかひろ

東京外国語大学大学院特別研究員（ドイツ語学）

小林大志／こばやしいし

東京外国語大学大学院特別研究員（ドイツ語学）

木村千恵／きむらちえ

東京外国語大学大学院博士後期課程（ドイツ語圏文学）

DER KEIM Nr. 43-44 査読担当者

成田節 （東京外国語大学教授）

西岡あかね （東京外国語大学准教授）

藤縄康弘 （東京外国語大学教授）

山口裕之 （東京外国語大学教授）

《敬称略・50音順》

DER KEIM Nr. 45 原稿募集

次の要領で DER KEIM Nr.45の原稿を募集します。

- 原稿分量：和文 A4（38字×34行）21枚以内
 欧文 上記相当で720行以内
 （いずれの場合も欧文200語程度の抄録をつける。）
- 申し込み締切り：2021年7月中旬
- 原稿締切り：2021年10月中旬
- 申し込み先：〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
 東京外国語大学ドイツ語専攻気付
 東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会
 E-mail：derkeim@tufs.ac.jp

投稿をご希望なされる方は、論文や研究ノート等の題目とその概略を和文または欧文 A4一枚程度に記載し、氏名、住所、電話番号（メールアドレス）を明記の上、メールにファイルを添付して上記アドレスまで送信ください。執筆要項は執筆をお願いする段階で編集委員からお送りいたします。「論文」「研究ノート」等の最終的な採否は編集委員会で決定します。

編集後記

2019年度に予定しておりました DER KEIM 第43号は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の対応ならびに掲載本数の都合から刊行を中止し、このたび第43・44合併号として刊行に至りました。一年遅れとなってしまいましたこと、深くお詫び申し上げます。

本号には、ドイツ語学に関する論文1編と研究ノート1編、ドイツ語圏文学の研究書に関する書評1編が掲載されています。執筆者の方々にお礼申し上げます。また、査読いただいた先生方のご指導とご助言により、今号も内容的に充実した会誌として発刊できる運びとなり、まことに光栄に思います。編集・校正に際しては、有限会社ノースアイランドの方々に大変なご尽力をいただきました。今号に携わったすべての方々に、この場をお借りしてお礼申し上げます。

さて、本誌は今号よりオンラインのみでの刊行となります。かねてより、本誌は各記事を本学の学術機関リポジトリ「東京外国語大学学術成果コレクション」に登録し、インターネット公開を進めておりましたが、このたびの感染症への対応、ならびに本誌の継続的な刊行のための編集作業の簡素化を目的として、完全オンライン化の運びとなりました。今後は紙媒体に代わり、本研究会のホームページ (<http://www.tufs.ac.jp/st2/club/derkeim/>) にて刊行を続けてまいります。なお、電子化にとめない、個人情報保護の観点から別冊「会員名簿」を廃止いたしました。ご理解のほど、よろしくお願い申し上げます。

本誌がドイツ語学やドイツ文学に興味をもたれるひとりでも多くの方々の目に止まることを期待しております。幸いにもご一読いただき、忌憚のないご意見やご感想をお寄せいただければ、次号以降の改善におおいに役立つものと思います。本誌のさらなる発展に向け一層の努力を重ねてまいりますので、皆様の温かいご指導とご支援をお願いいたします。

DER KEIM Nr. 43-44 編集委員
木村 千恵（博士後期課程）
安田 佳織（博士前期課程）
連絡先：derkeim@tufs.ac.jp

DER KEIM Nr. 43-44

発行日 2021年3月31日
編集発行 東京外国語大学大学院
ドイツ語文学研究会
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
東京外国語大学 ドイツ語専攻気付
電話番号 (042) 330-5223
振込口座 東京都府中市紅葉丘郵便局
口座番号 00170-2-48229
制作 有限会社ノースアイランド
印刷・製本 有限会社ノースアイランド